
魔法少女リリカルなのは～最強の転生者～

ジュナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜最強の転生者〜

【Nコード】

N76830

【作者名】

ジュナス

【あらすじ】

突然死んでしまった不幸な男、桐島大輔。彼の死は神の過失による物だったため、もう一度生きる機会を貰った。そして彼は一つの決心をした。それは、

「チートでフィーバーしてやるぜ!!!」

．．．なんとも厨二くさい物だった。

作者はこれが処女作であるため途中で文体が変わると思われます。

ご了承ください。m(_ _)m

プロローグ（前書き）

初めて物書いてるんで皆さん生暖かい目で見てください。

プロローグ

（疲れた。今日も今日とて朝から晩まで予備校で受験勉強。全く気が滅入っちゃうぜ）

そんなことを考えながら帰宅するための電車を待つこの男の名は、
桐島大輔。

この春の大学受験において見事に浪人してしまっている19歳の男である。いわゆる負け組（笑）と呼ばれる人種である。

「誰が負け組だ!!」

そんな天の声に向かって吼えんなよ。周りから白い目で見られてんぞ？

（あゝ、マジでヤベエ。幻聴も聞こえるし、なんかフラフラしてきた。）

その時アナウンスが流れ、

「まもなく。番線を、特急列車が通過致します・・・」

その瞬間、彼はあろうことか線路に落下。そして気絶してしまったようだ。

周りも彼に呼びかけるが反応は無く、駅員も電車を止めようするが、間に合う筈もなく、

ピ————!!!!!!!!!!

『きや——！！！！！！！！』
周りから悲鳴が聞こえた。

プロローグ（後書き）

・・・以外に大変だったぜ（汗

第一話（前書き）

どんな感想でも嬉しいんでよろしくお願いします

第一話

「ん、ふあゝゝ。あれ？ここどこだ？」

そういつて彼、桐島大輔は周りを見渡していると、

「おっと、言い忘れてだぜ」

そういい彼は仰向けになり、

「知らない天井だ」

「なんじゃ、案外落ち着いてるんじやのう」

さつきまで誰もいなかった筈の場所から老人のような声が聞こえてきた。するとその声に彼は、少し驚きながらも、

「あれ？どうもこんにちは」

と返事をするが彼には違和感があるらしくしきりに首を傾げていると、その老人が

「当たり前じゃろう、ここはお主がいた世界じゃないんじやからな」

「あゝ、そうなんで……いやちよつとまで。冷静なれ。冷静になるんだ。落ち着いて、順番に考えるんだ。まず第一、俺は知らない場所に寝ていてお決まりネタをやった。次に……」

その時彼は何かを理解したのか、急に顔から血の気が引いて行き、

震える声で

「もしかして、俺死にました？」

「そうじゃ、理解が早くて助かるわい」

「嘘だ――！！！！！！！！！！」

10分後

「テメエのせいか！！！！この禿殺す！！！！！！！！」
と叫びながら老人に殴りかかる若者一名と、

「ズ、ズビバゼンデジダ！！」

と土下座している顔面がボロボロの老人がいた。

さらに30分後

「で、もう一回確認します。あなたは神なんですね？」

「はい」

「そのあなたが寝ぼけながら仕事である、死ぬべき人間の選別をしていたら、間違っって同姓同名の俺を殺してしまった。復活させよう

にも体の損傷が激しいためそれができない。間違いはあるか？」

「はい。間違いありません」

「で、責任者であるお前が出てきて、謝りに来たと」

「はい」

「お前のせいで死んだ俺は、元の世界では生き返らせることが出来ないが、お前の力を使って他の世界に転生することは出来る」

「はい」

「場所は何？」

そしてそのジジ、もとい神様は転生可能な世界を提示してきた

？…そのまま天国で幸せになる

？…パラレルワールドでもう一回生まれ直す

？…物語の世界に転生する。

「ねえ神様。生まれる時にステータスとかいじれる？」

「はい、考えられる限り全て出来ます」

「じゃ？にするから、紙と書くもの出して」

そう言いながら彼は紙に転生したい世界、ステータスを書いていく。

その内容は

某level5三人の能力、海賊達の世界の覇気なるもの、東京の学園都市に住む唯一の魔導士の知識と頭脳、埼玉の学園都市に住む魔法使いの知識、冷蔵庫様のように宇宙で活動出来る力、某やサイ人の戦闘力、とある電脳生命体の能力、色々な次元に行ける世界の人々が持つ核なる物などなど、ついでに様々な道具も追加で用意すること

本人でさえ少し無理したかな〜と思えるにも関わらず、

「ここまでになると飛ばす世界はランダムになるけどいいかのう？」

と返事をしてきたため

「その程度なら問題ないです。言い忘れてたけど、最低でも主人公達と同年代で体は人間でお願いします」

と、了承。

「じゃ時間がないのでしゅっぱーっ」

と言われ彼はその場にできた穴へと消えていった。

その時彼は、

（最後のあれが無ければ許してやったのにあのジジイ）

と思っていた。

第二話

side大輔

どうも皆さんこんにちは。あのクソジ、もとい神様のおかげ（ミス）で別世界（らしい）に転生してきた、桐島大輔です。只今自己紹介と言う名の現実逃避をしている。何故かって？何故なら、

「オギヤ——！！」

まあそんな感じで今生まれたばかりなんだよ。ただどね、これが俺には二度目の生つていうことは分かっているから、普通はそこまで慌てなくてもいいんだけどね。

この状況が分かる人はあまりいないと思うんだよ。

もう一度言つぞ。今俺は生まれたばかりなんだよ。なのによ、

「オギヤ——！！！！（いきなり捨てるって、どういうことじや——！！！！）」

という感じにただいまどっかの公園に捨てられちゃった。マジ無責任にガキ産むんじゃねーよ。

とまあ現状説明終了。いくら能力がチートでも赤ん坊の状態ではつとかれたら流石に死んじまうってわけで、

「オギヤ——！！！！（誰か助けて——！！！！）」

あ、もう無理。チート持つて生まれたのに使わずに死ぬとかありえないわ。おやすみ（永眠的な意味で）。

side out

●○○●○○●

五分ほど前

side 三人称

「あら？たしかこの辺りから赤ん坊の泣き声が聞こえたと思うたんやけど……」

そう言いながら腕の中に赤ん坊を抱えた女性が公園の中に入ってきた。

すると、

「オギヤ——！！！」

「あら、やっぱりいるんやないの。今日は散歩に来てよかったわ。あんたと同じ年だといえなあ」

そう女性が抱えている自分の子に話しかけながら公園を探しているが、人が見つからないので、

「あらあ。ちょうど入れ違いやったんかな。残N「オギヤ——
——！！！」へ？人がおらへんのに……。まさか捨て子！？」

そう言うなりその女性は声がした方に向かって走っていくと、ベンチに横になって寝ている赤ちゃんを見つけた。

「見つけた！やっぱり親は居らへんな・・・可哀相にいきなり捨てられるなんて・・・」

そしてこの子の横に手紙があることに気づき読んでみると、

「この子を見つけた方は拾ってあげて下さい」

と書かれてあった。

「可哀相に・・・この子はなんにも悪くあらへんに」

そう思いながら腕の中の我が子を見て

「よし！この際や！双子産んだと思ってうちが育てたろ！」

と言いその子を抱え上げたが

「あかん！この子すごく冷たいやん！早く病院につれてかな！」

そして救急車を呼ぶのであった。

side out

●○○●○○●●

side大輔

「バブウ（知らない天井だ）」

つてちょっと待て！俺は公園に捨てれたはずだぞ！？

それなのにここは病院っぽいから、誰かが見つけてくれたんだな。顔は分からないけど命の恩人よ、感謝するぜ。

ひとまず生命の危機は回避出来たか。

でもこれからは孤児院暮らしか・・・

やべ、ちょっと鬱になってきた。

「~~~~~！！！」

「~~~~~！！！」

あん？外が騒がしいじゃねえか。病院内は静かにしろよな。俺を産んだ奴といい、この世界は碌な奴がいないのか？まあいいか。とりあえず鳴いとくか。

「オギヤ——！！！」

side out

●○○●○○●

side 三人称

「先生！あの子は大丈夫なんですか！？」

「ええ。あなたが見つけるのが早かったおかげでなんとか間に合いましたよ。この時期はまだ寒いですから、あと一時間遅れてたら間に合わなかったかもしれません」

因みに今は3月暮れであるがまだまだ寒い日は寒いのである。

「そうですか」

「そういえば、あの子はどうしたんですか？あなたはたしか去年女の子を産んだと思うんですが」

そして女性はなんだか悲しそうな顔をして、

「今日はうちの子と散歩に出掛けたんや。それで公園で赤ちゃんの泣き声はするんやけど、人の姿が見えへんかったからもしかしたら
って思ったら」

そう言つて懷から手紙を取り出して医者に見せた。

「そうだったんですか。じゃああとは警察と役所にお任せしまし
う」

そう言つて医者が電話をかけようとしたら、

「待つてください！あの子は孤児院に行くんですか！？」

「ええ、たぶんそうなるでしょう」

「じゃあ私があの子を引き取ります！」

「あなたは今まで一歳になっていないお子さんがいるでしょう？やめておいた方がいいんじゃないですか？」

「大丈夫ですよ！双子を育てると思えば軽いもんですよ！」

そういう女性の目にはしっかりと覚悟の色が見えたため、医者了承するしかなかった。

「わかりました。ひとまず警察と役所にはこちらから連絡しておきますから、あとはあの子のことを話し合って下さいね？」

「ありがとうございます！」

「あともうひとつ。病院では静かにお願いします」

「あ、すいませんでした」

「オギヤ——！！！」

「お、起きたようですねそれじゃ行きましょうか」

「はい！」

とまあそんな感じでいつの間やら養子になることが本人に確認されずに決定された。

まあ本人は赤ん坊だから決定権は無かったのだが。

s i d e o u t

第三話（前書き）

作者はアニメとWikiを参考に書いていますがもしかしたら違っているところがあるかもしれません。

あとはやての過去は全て「小さい頃」とかだったため作者の妄想全開で書いているため、そういうのが苦手な方は戻ることをお勧めします。

では始まります。

第三話

どうもみなさんこんにちは。現在、たぶん三歳の桐島大輔、もとい八神隼です。

え？なに？なんでたぶん三歳かって？なんで名前変わってんだって？分かりました。説明しましょう。

まず第一に、年齢は捨てられたから正式には分からないけど、拾われた日が誕生日ってことになってます。

次に名前なんですけど説明すんのが面倒なので回想行きます。え？メタ発言すんなって？別にいいじゃん。気にすんなよ。てことでgo

あ、止めて！石投げないで！ごめんなさい！

病院から退院する日

「今日から私があなたのお母さんになるんよ？」

あれ？なんか今関西弁っぽかったな。これから行く孤児院は関西なんかな？生前は関東だけに、関西弁を覚えんの大変そうだな。

「あとこの子は今日からあなたのお姉さんになるんよ？ほらはやて、よろしくって握手して」

「バブウ」

握手か、手出してやるか。あれ？ちょっとまてお前耳引つ張るんじやねえ。あつ、ちょ

「オギヤ——！！؟؟？（イテエ——！！！！！！？）」

「あつ、こらはやて離しなさい！痛がつてるやない！」

「キヤツキヤツ！」

笑ってんじやねえよテメエ！！いつか覚えておけよ。俺の力の最初

の犠牲者の座はお前の予約席にしよう。光栄に思うがいい。
フハハハハハ！

ヤベ海。の野郎が乗り移ってきやがった。まあいいか。
覇氣使ってやるぜ。ハアッ！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ダバ！！？？（グア！！？？）」

「こらはやて！いい加減にしろさい！」

「キャッキャッ！」

覇氣が効かない上に蹴られる、だと？

「おゝい。聞こえてるか？」

あん？なんだ？いつかのジジイの声が聞こえてきやがる。
今のはそんなに効いたのか？

「違うわい。これはワシがお主に直接話しかけておるんじゃ」

テメエ、ジジイ人の心読みやがったな！

「そうじゃよ。そうでもせんと会話できんじやろ？」

ちつ、隠し事が出来ないのか？まあ今はそこまで深刻じゃないからこれは後回しでいいか。

で、本題はなんだ？話し相手になってくれってわけではないんだろ？

「お主は本当に聡いのう。では本題なんじやが、お主が要求してきた能力は使えん」

あゝ、二度目の人生はつまんなそうだなゝクソジジイが変なところに転生させていきなり天涯孤独とかありえねえわ。もう死ぬか！よし死のう！

「ま、待て早まるんじやない！話は最後まで聞くんじや！」

なんだよ？俺今からどうやって死のうか考えてるんだけど邪魔しないでもらえるかな？

「だから落ち着くんじや！力はちゃんと使えるようになる！」

なん、だと？

話を聞こうじゃないか。

「なんじゃその変わり身の早さは。まあいいわい。これ以上は話が逸れる。まず言うことは二つある。

一つ目は魔力などの基本ステータス何じゃがそっちは基本的にいつでも使えるんじゃ。

じゃが問題は二つ目なんじゃ。これはお主が要求してきた道具や特殊能力の類に関するなんじゃが今はそれには鍵がかかっておる状態なんじゃ。それを解除するにはいくつか方法がある」

神曰わく

？…誕生日を迎える

？…死の淵まで行く

あとは神様の気まぐれらしいが、

まあ、チート能力が一年で一つ増えるならそれぐらい許してやるかな。

「なんじゃ。やけにあっさりしてるのう？」

ただし一つ条件がある。

「なんじゃ？」

今すぐ能力1つよこせ。

「慌てなくてもそのために今回は話かけてるんじゃ。なにがいい？」

学園都市第一位の能力とその頭脳。

「いきなりハードルが高いのう。まあなんとかしてやるわい。それ！」

お？お！？おお！！？視界の全てのベクトルが見えやがる！これでこの世界に俺にかなう者はいないぜ！！

これからは俺の時代だ！！

ゼハハハハハハ！！！！

ヤベ、。髭が出ちった。

イタッ！？

おいジジイ！なんか頭が割れそうに痛いんだけど！？

「そりゃ赤ん坊が脳の負担が大きいその能力を使えばそうなるわい」

そりゃそうか。これはゆっくり馴らしていくか。

あと一つ質問。俺の誕生日は？

「・・・知らん」

は？

「気付いたら、お主捨てられてるんじゃないもん。いくらワシでもわからんわい」

え？

じゃあの？つて無理ってこと？

俺は毎回死にかけないりや能力解放できないの？

マジで？

俺かなり不幸じゃね？

いきなりテンションダダ下がり何ですけど？

「そんなに落ち込まなくても大丈夫じゃ。お主がもらわれる日を誕生日扱いするから。だから流石に可哀相だと思ったから今日能力の解放に来たんじゃよ」

マジ？

「マジじゃ。」

はあ。よかったわ。

「じゃ次会うのは来年の今日じゃ。それが死にかけた時じゃが、そんなにすぐには会いに来るなよ？」

わかったよ。じゃあなじいさん。

あ。1つ聞き忘れてたけど今日何月何日？

「今日は3月30日じゃ」

ん。わかった。

あれ？なんか周りのベクトルが止まってるように見えるんだけど？

「あ、それならワシが時間を止めといたんじゃ。赤ん坊が蹴られて泣かないと不審に思われるじゃろ？じゃあ時間を戻すから元気に暮らすんじゃな」

今度こそじゃあなじいさん。

さて。あとは流れに身を任せますかな。じゃあ、

「オギヤ——！！！！」

「ほらこの子泣いてもうたやないの。これからこの子は弟なんやから仲良くしんさい」

この人が施設の親代わりの人なんだ。結構若いな。あの赤ん坊も捨てられたのかな？可哀想に。

□ 数分後 □

「じゃあうちに帰りましようね」

あゝ、やっと出発か。長かった。つつか痛かった。あいつ俺をおもちやだと思ってるのか？

□ さらに数十分後 □

「ここが今日からあなたのうちになるんよ」

あれ？なんか見た感じ一軒家なんだけど？

あ。表札がある。なにに？八神？

あれ？俺は施設に連れてこられたんじゃないの？

俺の扱いどうなんだ？

「そうや、まだ名前教えてなかったな。あの手紙には名前書いてあらへんから私が考えたんやけどな。今日からあんたの名前は『隼^{しゅん}』や。八神隼。いい名前やる？」

は？そこは普通『月^{ツキ}』だろ？

つてそうじゃねえ！

この人手紙って言ってたから俺を見つけてくれた人なのか？つうことは俺の命の恩人なのか？

ヤバイあの人の後ろから後光が射してくるように見える。

俺はなんていい人に拾われたんだ。

この転生先はやっぱ成功だったかもしれないな。

これからこの家が俺の自宅か。結構いいところだな。

オラ、ワクワクすつぞー！！

やっべ悟。の真似出ちゃうほどテンション上がってきたんですけど！

回想終了

てなわけで俺は今八神隼、三歳ちょいです。

いやあゝ。この三年が長かった。実はすでに一回死にかけてしまいましたよ（汗）。

え？何故かって？いやですよそんなの。言いたくないですよ。

あつ！やつ、やめてください！石投げないで！あとそこ！覇気飛ばさないで！意識飛んじゃうでしょ！！？

わかりましたよ。言えばいいんでしょう！？笑わないで下さいよ！？これフリじゃないからね！？お願いしますからね！？

一歳ちょっとの時インフルエンザで死にかけたんですよ！！

ほらそこ！！だから笑わないでって頼んだじゃないですか！！そんなに腹抱えて笑うことじゃないでしょ！！
だからこの話はしたくなかったんですよ！

まあいいです。そのおかげで今は五つ特殊能力がつけました。最初のうちはスキルが少ないから死にかけて少しよかったかもしれませんが。

え？なんのスキルにしたか？ハハハ！まだ秘密ですよ？その時がきたらお見せしましょう。

あと能力を貰うときに神様からかなり重要なことを聞かされたんですよ。

それはここが、【魔法少女リリカルなのは】の世界らしいんですよ。

え？そこまで重要に思えないですって？

H a h a h a h a ！！

何を言ってるんですか。俺は「魔法少女リリカルなのは」なんてのは名前と三部作あるって事しか知らないんですよ？

いくらチートでもその世界の魔法体系がわからないんですよ？

あとこの世界の魔法を使うために必要なのは《リンカーコア》っていう器官らしいんですよ。

でもね？これは俺がこのアニメを知らなかったせいでチートにこれを指定出来ていないんですよ。

まあそれでもこの地球ではあまり持っている人がいないこれを運良く持ってたんですよ。

だが！だがしかし！主人公たちはこれのランクが最低でも《AA》らしいんですが、俺は《E~D》位しか無いんですよ！

これでこの世界でどうやってチートでフィーバーすればいいんですか！?!?!?!

そこで俺は決めました！俺はこの家族を絶対幸せにしようとな！

原作介入？ハッ！そんなもんこっちに被害が出るまで何もするつもりはありませんよ！

つつか原作知らないから介入のしようがないんですけどね！

おつと俺の近況報告ばかりになってしまいましたね。

こっからは我が八神家についての近況を報告したいと思います。

今年度から親が転勤だったため俺たちは引っ越しをしました。

場所は海鳴市というところらしいです。

ここは山も海もあつてとても良いところですよ。

あと家は一戸建てを一括で買っていたところを見るとかなり裕福な家っばいです。

そして俺の両親は養子の俺にも本当の子供のように可愛がってくれ

る優しい人たちです。

そして俺とはやては最近幼稚園に入りました。

はやてはいつもニコニコしていてみんなの中心にいますよ。
まるでみんなの太陽みたいな存在です。

元気があっていいですね。

え？お前は どうしてるのかって？

一回高校卒業してる人間にあの中に入るのは辛いので、いつもはやてを見守っていますよ？

あっ！こらそこ！ロリコンとか言うんじゃないよ！こっちだって早く時間が過ぎて欲しいわ！

すみません、とり乱しました。

まあそんな感じで今は特筆すべきところはありませんよ。
このまま何もなく平和に時が過ぎ去って欲しいものです。

第四話（前書き）

今回もオリジナル設定が入ります。

あと少し補足をあとがきに書きましたんで出来れば読んでください。

ではどうぞ。

第四話

「（どうしてこうなったんだ。）」

今俺がいるのはおれとはやての両親の葬式場である。

「ねえ隼。なんでおかんとおんはあんな狭いところで眠ってるん？」

そうはやてが尋ねてくる。

はやてはまだ五歳なのだから、人が死ぬというのがどういう事が理解出来ないのだろう。

しかし二度目の生を受けた俺にはわかってしまう。
こんなわかりたくないことさえもわかってしまう。

「ねえ隼、聞いて…どうしたん？何で泣いてるん？」

しかしはやてにはどうしても伝えられない。
いや自分の口からは伝えたくないだけかもしれない。

「ううん、何でもないで？目にゴミが入っただけやから。ちょっとトイレに行ってくるわ」

俺はそう言っただけでその場から逃げるしかなかった。

トイレに入っていると外から大人たちの声が聞こえてきた。

「お子さんたち可哀想に。まだ小学生にも成ってないのに両親を事故で亡くしてしまうなんて……」

「それよりどうする？女の子の方は本当の子供らしいが男の子の方は養子らしいじゃないか。」

「やっぱり女の子の方は誰かが引き取って男の子の方は施設に入れたらええんちゃうか？」

「じゃあ誰があの子を引き取るのよ？あたしは嫌よ。あんな障害のある子なんて。なんで引き取ってまで介護しなきゃいけないのよ」

「俺だつて嫌だよ」

「あの子も男の子と一緒に施設に入れてあげればいいじゃないか。まだあの年なんだ、二人が養子つて事は認識してないだろうしバラバラにしたらごねてもっと面倒なことになるよ？」

「それもそうね。じゃあ遺産の方はどうするの？あの家族結構裕福だったからだいぶ残つてると思うわよ？」

「それと確か家もローンが無い一軒家だったと思うからこれも売ったら結構な額になると思うぞ？」

「それもそうやな。後で弁護士にでも相談しようやないか」

『ははははは！』

もう俺は我慢が出来なくなった。どうしてもあの腐った大人たちが自分の恩人であり両親の親戚には思えない。このまま自分の能力を使って殺そうとさえも思ってしまうほどに。

だけどそうすればはやては本当に一人になってしまう。

このあと俺さえいなくなったらはやての心は粉々に砕けてしまうかもしれない。

それだけは絶対にあってはいけない。

だから俺は我慢しようと決めた。しかしこんな奴らが両親の葬儀にはいて欲しくない。だから……

ギイ……

「まずい誰かに聞かれたか？（ボソボソ）」

「大丈夫よ。あれは確か隼っていう男の子の方よ。あの年の子がこんな話わかるはずないじゃない。（ヒソヒソ）」

「それもそうだな。（ボソボソ）隼君これからみんなはあっちに行かなきゃいけないから一緒に行こうか」

「……………えれ」

「え？」

「帰れつつつてんだよ！！この蛆虫共が！！！！
てめえら母さん達を弔う気持ちがないんだったら早く帰れよ！！！！」

「なっ！言わせて貰うがあの人はお前の両親なんかじゃないんだぞ！？」

それを母親だなんて……」

「そんな事始めから知ってたんだよ！！！」

俺が捨てられたことも！あの人達が拾ってくれたってことも！！
だけどな！！自分の子でもない俺のことを本当の子の様に可愛がって！病気で死にそうになっただけときもずっと！ずっとすぐそばで看病してくれた！

そんな人たちを親じゃないなんて言える訳ないだろうが！！！」

それともなんだ！？てめえらにとってはそんなのは恩でも何でもないのか！？

てめえらはそこまで腐ってんのかよ！！！」

「なんて口が悪いんだ！そして私達が腐ってるだ！？
なにを根拠にそんな事を言ってるんだ！！！」

「さっきの施設や遺産の話が聞こえてないとしても、わかってないとも思ってるのか！？

もしそう思ってたんなら腐ってる以外でどう表現すりゃいいつつうんだよ！」

そう言いきった、その時

「隼？どこや？あ、こんにちは。お、おったおった」

そう言うてはやてが大人の間を車椅子で通ってきた。

「隼。戻って来るん遅かったから心配したんやで？」

「ごめんな、はやて。もう戻るか」

そう言うてはやての車椅子を押して大人達の間を通って戻るとき、

「てめえらはとつと帰れ。ふざけたことして母さん達の顔に泥塗りやがったらタダじゃすまさねえぞ（ボソボソ）」

「ん？隼なんか言つた？」

「いや、なんでもないで？」

「そんならええわ。それよりさっきなんかおとんの会社のじょしつて人が来て私らを探しとつたで？」

「ん。わかつたわ」

「あ、あの人や」

するとそこには明らかに外国人がいた。
するとその外国人はこっちに来て

「どうもこんにちは。隼君でよかったかな？」

「はい、そうです」

「ちょっと君たちに話があるんだけど、いいかな？」

「わかりました。僕が聞きますよ。はやて、僕はこのおじさんとち
よお話してくるから待っててな」

「うん！わかった！」

そう言ってそのおじさん（おじいさん？）と一緒に外に出た。

「で、おじさん。話っていうのは？」

「まずは自己紹介からでしょうか。私の名前はギル・グレアム。君のお父さんの上司だよ」

「そうですか。生前は父がお世話になりました」

「ははは。いいんだよ？ そんなにかしこまらなくて。それにしても随分と大人びた言葉が使えるんだね。何歳だい？」

「よく言われますよ。」

「年ははやてと同じで今年で五歳になります」

「まだ四歳なのにそんな言葉づかいが出来るなんて凄いじゃないか」

「いえ。たまたま『完全記憶能力』というのがあつたおかげですよ」

「ほう、それは凄いじゃないか！」

「そんなに凄い物じゃないんですよ？」

「人間忘れてこそ生きていける動物なのに忘れられないんですから。こんなのがあつても勉強にしか使えないんです」

「すまないな」

「いえ、大丈夫ですよ。それより話ってなんですか？」

「いや、最初は線香を上げにきたただっただけだね。

そしたらあれは君らの親戚でいいのかな？その人達が君達を食い物としてしているのを聞いてね。

それで私もムカついたものだから彼らにビシッと言ってやるつもりだったんだけどね。そしたら……」

「俺が怒鳴っていたと」

「そうだよ。流石に無関係な私が行ったら余計ややこしくなってしまうから二人と話がしたいと言って、はやて君に君を呼んできて貰ったんだよ。もう少し長引いていたら君も危ないと思ってね」

「すみません、お手数をお掛けしまして」

「ははは。いいんだよ。それより本題なんだが君達はこれからどうするつもりなんだい？」

「さっきの人達の言い方はムカつきましたが、やっぱり税金やらなにやらは子供の自分達にはどうしようもないので施設に入ろうかと思っています」

「やっぱりそうなってしまつか。親戚があんなだとね」

「ええ」

「よし、わかった。私がそういうことの面倒をみてやろう」

「え？なに言ってるんですか。そんな事なくていいですよ」

「なに。遠慮する必要はないさ。君たちは子供らしくもつと元気に暮らさない。その他のゴタゴタは私が面倒をみようじゃないか」

「無理ですよ。俺は死というものがどういうものか、大人並にはわかってしまってますからまだいいんです。

ですがはやては普通の五歳の女の子なんですよ？

その女の子が急に両親が死んだからもう会えないと言われて……普通に過ごせる訳ないじゃないですか。はやては足が悪くなつて……周りの友達が離れていつてしまった時だつて……ずっと泣いてたんですよ？

それを僕と両親が励ましてやっと明るくなつたつていうのに……こんな事になってしまつて……どうやって励ませばいいんですか……どうやって普通の子供らしく暮らしていけばいいんですか？」

「……すまない。少し無神経過ぎた」

「いいんですよ。」

あと本当にお金のことなどの面倒をみてくれるんですか？」

「もちろんだよ。」

困ったことがあったらいつでも連絡してきてもいいんだからね？」

「はい。ありがとうございます」

「じゃあ、はやて君のところに戻るうか」

「はい。……あ、僕はもう少し外にいますから先に戻っていてください」

「？わかったよ」

そう言ってグレアムさんは建物の中に入っていった。

「ねえ。とうさん、かあさん。そこにいるんでしょう？大丈夫だよ。僕は霊感が強いから見えるし、話も聞こえるから。」

そう言つとそこに彼の両親が現れた。

「ごめんなさいね。あなた達はまだこんなに幼いのに……」

「僕は大丈夫だよ？

それよりもありがとう。

捨て子だった僕をここまで育ててくれて」

「知つてたん？」

「うん。小さい頃の記憶なんだけどね？まだしっかり覚えてるんだよ？

あの時は死にそうなところを助けてくれて……あんなに温かい家庭に迎えてくれて……ありがとう」

「そんなんええんやで？

隼はもう私たちの息子なんやからな」

「それでも……ありがとうございました」

「どういたしまして。でももっと大きくなるまで見ていたかったな」

「こんな時に言うのもあれなんやけど、はやてにはこの事を伝えるん？」

「いえ、まだ理解できないでしょうから。でも時期がきたら話しますよ。」

これからはやてと二人で支えあって生きていきますから」

「フフツ。なんかそのセリフ、プロポーズみたいやな」

「ははは。そうだな。隼とはやては実際に結婚できるんだし」

「なっ／＼／＼父さん、母さん。ふざけないでくださいよ／＼／＼」

『ははははは！』

「ふう。まあいいです。これからは僕がはやてを守っていきますから。」

母さんたちは天国から僕たちを見守っていてくださいね」

「そうやな。じゃあね、隼。あなた達がいてくれたから私たちは幸せだったで」

『またね』

そう言つて二人は消えてしまい、残つたのは涙を流す少年一人だけだつた。

「さて、これからは二人暮らしか。最初は大変だけど頑張ろう」

そう言つた少年の目には強い覚悟が宿っていた。

第四話（後書き）

はやての両親の亡くなるイベントと足の悪くなるイベントの時期と順番は作者が勝手に決めたものです。
あしからず。

あと『完全記憶能力』はスキルを解放する時にインデックスの知識と能力って事なので二個目になります。

そして靈感の強さはステータスMAXによるものです。
靈感の強さ自体はブリーチの一護並の見える、話せる、触れるという状態です。

ではまた次回にお会いしましょう。

第五話（前書き）

たいへん遅くなりました。
言い訳はしません。

ネタが浮かばなくて全くかけなかったorz
そしてついでに風邪もひいてました。

つつわけで今回はグダグダです。飛ばしでもってとくに問題無いかもしれませんが。

ではどうぞ

第五話

あの後は大変だった。

母さんや父さんの友人だと思われる人に一人一人連絡したり、また遺産のことで来た蛆のような親戚を追い返したり、はやてを元気づけたり。

そんな事が一段落ついたのは、約半月後の事だった。

しかしまた一つ問題が生じてしまった。

それは小学校の事である。

調べたところ、障害者でも通える学校は今住んでいる街の周辺には無かったのだ。

そうすると学校に行くためには引っ越しをしなければならないが、両親との思い出が遺っている家から離れるのは憚られる。どうするか、とはやてに聞いてもやはり

「この家から離れたない」

と言ってくる。俺が、

「それだと学校に通えないよ？」

と聞いても、

「それでもええ。それでもこの家から離れたない」

と断固として譲らない。

そこには幼稚園の頃のトラウマが少しあるのかもしれない。そうすると流石にどこの学校にも席を置いて無いのはまずいので、きとうに公立の学校に入れて休学扱いにして貰おうと決めた。

しかしそうするとはやてが学校に行かないなら俺も二度目の小学校なんて行きたくないから俺の分も休学扱いにしてもらおうとしたが、

「隼はしっかり学校行くんやで」

と言ってきたのである。

流石にここは俺も譲れないのでかなり長く口論になった。

しかしここで俺は二度目の人生だから知識がある＋完全記憶能力があるので海外の大学に飛び級で入って飛び級で一年で出ようという名案（迷案？）を思いついた。

だけどこれだと一年はやてを独りにしてしまう。

どうしようかと迷った結果、やはりはやてに相談しようと思つて聞いてみると、

「隼の好きにしたらええ」

と言っので思わず、

「じゃあはやてと一緒に休学してる」

と言ったら殴られてしまった。(ノ・。・)

しかしよく考えるとはやての病気は原因不明なのでいつ治るかわからない。

だから小学校と中学校はそれで休めてもそこから先は独りになりがちになってしまう。

そこで迷いに迷った挙げ句、ついに今日、飛び級で海外の大学に行く事に決めた。

「はやて、大事な話があるんや」

「どっしたん？」

「俺、海外に行ってくる」

「そうか。ちゃんと決めたか。そんならええんや。私は隼の邪魔にはなりとうないからな。私は隼のお姉さんなんやから」

「ごめんね。一年間独りだと寂しいかもしれへんけど、ちゃんと手紙出すから」

「？電話じゃ駄目なん？」

「海外と日本だと時差があるんよ。簡単に言うところちが昼の時、向こうは夜つてことや。まだ俺たち小さいんやから夜更かし出来ひんからそれで我慢してな？」

「隼こそ独りが寂しいからって途中で帰ってくるんやないで？そんなんやと家に上げてあげへんからな」

『ははははは！』

○ ● ○ ● ○ ● ○ ● ○

そして時が経って出国日

「じゃ行ってくるで、はやて。一年間だと思っけど長引かへんようしっかり頑張ってくるな？」

「あんまりムチャせんときな？」

「ははは。これが一生の別れやないんや。そんな泣きそうな顔せんで笑って見送ってくれや」

「な、泣きそうな顔なんてしてへん！あんまり私を怒らすんやないで！」

「じゃそろそろ家出んと、飛行機に遅れてまうからもう行くで？」

「もう！話逸らして！まあええわ。しっかり頑張ってくるんやで？怪我せんときな？」

「うん。じゃあねはやて。いってきます」

「いつてらっしゃい」

そう言って俺はタクシーに乗り空港に向かった。

○
●
○
●
○
●
○

「着いた。ここがアメリカか。まず、グレアムさんが家に案内してくれるっていったよな」

そう呟いて周りを見渡すと一人の老人の姿が見えた。

「グレアムさん、お久しぶりです。お元気でしたか？」

「久しぶり、隼君。私は元気だったよ。君たちは？」

「俺は元気ですよ。はやては相変わらずですが」

「そうか。それよりここでの立ち話もなんだ。まず荷物を君の家に置きに行こう」

「すみません。こっちで住居までお借りしてしまつて。1ヶ月ぐらいすればお金を返せると思うので出来れば口座を教えてほしいのですが」

流石に金借りるのは嫌だしな。まあ直ぐに金作れるだろ。

「いいんだよ。子供がそんな事気にしなくても」

「いいえこれから大学生になるんですから、それくらいはしっかりやります」

実年齢20ちょっとだからそこまで子供扱いされるのもむかつくな。

「しょうがない。私に返すお金よりも自分のお金を優先するんだよ？返すのは直ぐじゃなくてもいいんだからね？」

「はい。ありがとうございます」

「それじゃ行こうか」

そう言っただタクシーに乗って新しい家まで向かった。

○●○○●○○●○○●○○

大学入学数日後

大学の研究室にも入ったことだし、実績を残さないと不味いな。
学園都市の科学技術で特許を取るのもいいんだけど、それだといくら入るかわからないんだよな。

そうだ。たしかこの世界だと数学の問題に懸賞金が懸けられてた筈だ。

そう思いながらパソコンで問題と賞金額を調べていく。
すると一問につき100万ドルの問題が六問もあった。

一方通行の頭脳を持つ俺にはあまりにも簡単すぎるな。
しかもこれを全て解くだけで600万ドル（五億から六億円）稼げるんだ。なんて楽なんだろう。

そう考えながら詳細を読み進めていくと一つ見逃せない文章が出てきた。

それは「二年間の経過期間を経て解が学界に受け入れられたことが

確認されなくてはならない」というものだっ

これだと金になるのはいいんだが、一年で大学を出る実績にはならないな。やっぱり特許取るかな。

そして色々な発明をして一年を過ごすのであった。

○●○○●○○●○○

一年後

「教授、お世話になりました」

「いや！君は卒業しないでくれ！この大学の研究室で一緒にやっていこうじゃないか！！」

「いやいや。そう言ってくれるのはありがたいんですが、日本に同じくらいの姉を独りにしてしまっているのもう帰りますよ」

「そんな事言わずに！いやむしろ君のお姉さんも一緒にこっちで暮らせるように取り計らうよ！！」

面倒な人だな。まあいい人だったけど。

「そんな事しなくてもいいですよ。それと姉は普通に年相応なんで、こつちでの生活に馴染めないだろうから来ることは無いと思いますよ」

「そんな事言わずに！お願いだから！！」

しつこいな。いや、この人にはここに来た理由を教えてやるか。

「教授。俺が大学に来た理由を教えますよ。

俺の両親は既に亡くなっているため姉と二人残されました。

しかも親戚も碌でもない人たちばかりだったんでこれからは二人で生きていくって決めました。

でもその姉さんは原因不明の病気のせいで足が動かない上に回復する見込みすら無いんです。

だからおれはずっと姉さんの傍にいたいから飛び級のあるここまで来たんです。

姉さんに無理言って一年の猶予を貰って大学を卒業してくるって約束したんです。

これ以上自分の事に時間を費やす積もりもないんです。

姉さんが幸せなら俺はどうでもいいんですよ」

俺がそう言つと、教授は泣いていた。

「君はだからそんなに一生懸命だったのか。

わかった。君を引き留めるのは諦めるよ。そして君のお姉さんの病気が治る事を祈ってるよ」

「ありがとうございます。一年間でしたが、お世話になりました」

「いやいや。この一年間は私の方が教わることが多かったよ。

こちらこそありがとう」

「それじゃ、失礼します」

「じゃあね。また会えることを祈ってるよ」

そう、教授と別れの挨拶を済ませて大学をあとにする。

そして日本行きの飛行機に乗った（もちろんファーストクラス。なんてったって金あるし）俺はふとあることを思い出した。いや思い出してしまった。それは……

はやてにいつ帰るか連絡し忘れてた！！しかもここ1ヶ月手紙出してねえ！！！！

帰ったらしばかれる!!! (。Д ; ≡ ; 。; Д)

そんな感じで俺が絶望していても飛行機は普通にフライト中。
そして何事もなく日本に着いたのだった。

第六話（前書き）

ダメだ。あんまり上手く書けねえ。

他の作者さんの文才がマジで羨ましいッス。

まあそんな感じなんで読んでくれたら幸いです。

ではござん（ ・ ）つ

第六話

俺は今一年ぶりの海鳴市に帰ってきた。

流石に一年ではあまり変わってないようだ。

そして俺ははやてが待つであろう、我らが八神家に向かって歩いている。

流石に土産も色々買ってきたしそんなに怒られないよな。

そんな風に考えながら歩いていると、家の前に着いた。

そして俺はインターホンを鳴らす。

しかし一向に出てくる気配がない。

こりゃ今日は病院だったかなと思い合鍵を取り出そうと思った時、

「うちに何か御用ですか？」

と聞かれ、振り返る。するとそこには車椅子に乗ったはやてがいた。

「はやて？」

「どなたですか？え……もしかして隼？」

「そうだよ。一年ぶりだね、はやて。ただいま」

「隼」！

そしてはやては車椅子で近づいてきて、

「バカアアア！！！」

思いつき殴り飛ばされた。

「グフツ！」

ちょ、ちよつと待て、はやて。そこは感動の再開で抱き合うところ
だろ！？」

殴られたところがかなり痛い。車椅子生活の所為で腕の力が強くな
っているのだろうか？

「うるさい！この一ヶ月手紙もよこさへんで……あたしがいったい
どれだけ心配したと思っとなるんや！……」

はやては泣きながら怒鳴ってくる。やっぱりそうとう心配していた
のだろう。

「ごめん、はやて。いっぱい迷惑かけちゃって」

そう言いながら俺ははやてを抱きしめる。

「隼から手紙がなかなか来なくなって、すごい不安やったんや。もしかしたら隼もいなくなっちゃったのかなって……私が引き止めなかったのがいけへんかったのになって……最近はずっとそんな事ばかり考えてたんや……」

「ごめんね。でも大丈夫だよ。俺ははやてを置いてどこかへ行くことなんて絶対にしないよ。だからそんなに泣かないで」

そしてはやてはしばらく俺の腕の中で泣いていた。

俺たちは今改めて家の中で向かい合っている。

そしてこの一年間手紙では書ききれないような事をずっと話していた。するとはやてがいきなり話を変えた。

「ところで隼？お姉ちゃんをこんなに心配させたんや。責任取ってくれるな？」

明らかにはやての纏っている雰囲気が変わった。

「えっと……何のことでしょう?」

「そうか隼はとぼけるんやな?」

「イエ、ワタクシガイケマセンデシタ。ドウゾナンナリトゴメイレイクダサイ」

「ヤベエ!! はやてが怖すぎて勝手に口が動いちゃった!! どんなことを命令するつもりだ!」

「よろしい。じゃあまず一つ目。これから私と一緒に寝ること」

「いや流石にもう小学生なんだから……」

「あん?」

「ひいひいひい! はやてがこえひい」

「はい、わかりました」

「ん。わかればええわ。じゃあ二つ目なんやけどな？」

はやてがなぜか顔を赤くしている。まさかもっと変なことを頼むつもりか！？

「今度から一緒にお風呂に入って欲しいんや」

WHAT?今はやてのやつなんて言いやがった？

「あれ？聞こえてへんか？私な、お風呂はヘルパーさんに頼んで二日に一回入ってんよ。」

でもな？私も女の子やから毎日入りたいんよ。だからお願いしてもええか／＼／＼」

ヤメロ／＼！そんな恥ずかしそうに頼むな／＼！！ロリに目覚めちやうだろ！？

「やっぱりダメ…かな？」

グハッ！！そんな潤んだ瞳で上目遣いとかすんなよ！拒否できない
だろ！？

「しょ、しょうがないな。そういう理由ならいいよ／＼／／」

「ホンマ！？ホンマにええの！？」

「いいよ。だけど条件がある」

はやてには悪いけどこれだけは譲れないんだ。

「何？」

「一緒に入るには九歳までだ」

「なんで？どうして？」

「俺たちは姉弟でも男と女だ。だから一応銭湯なんかの年齢制限
まで。流石にそれ以上は断固拒否する」

「うん。まあええわ。それまでにうちもこの足、頑張って治すな

「！」

「おう！頑張れよ！」

さてこれからは精神的疲労がハンパないことになるな。ハハハ……
やっていけないのかな、俺。

「あ、そうや！隼も帰ってきたことやし今からケータイ買いに行こ
！」

「いや、残念ながら俺はもう持ってるんだ」

「ええ？自分だけ持ってたでずるいやんか。なんか去年からいつ
に十年分ぐらい技術が進歩したってゆうから興味あったのに」

「いや、十年じゃない精確には三十年だ」

「ふうん。なんかすごいなあ。なんでそこまで詳しいんや？」

「それは俺が開発したからだよ」

「ええ！？ホンマ！？」

「ホントホント。ほかに色々開発したから世の中が少し進歩するぞ」

なんてったって一方通行の頭脳にそういう知識があったから開発するのにも余裕だったぜ。

つつかこの世界の科学技術って俺が元々いた世界よりも五年から十年は遅れてるんだよな。

だけどそのおかげで金がヤバイくらい入ってくるんだけどね。

「つつわけで、はい。これが最新作だよ。ちなみに世界中で発売前にも関わらず発売後三ヶ月先まで予約でいっぱいなんだよ」

「でも私がこんなすごいもの貰ってええの？」

「ははは。いいんだよ。むしろ使ってもらうために頑張って開発したんだよ」

「ありがとう！」

そう言うてはやてが抱きついてくる。

「どういたしまして」

「でもええの？まだまだこうゆう事続けてたかったんとちゃうん？」

自分が俺の邪魔をしたと思ってるなこいつは。

「俺がこうゆう事してたのは世の中を便利にするためじゃない。ましてや自分のためでもない」

「じゃあどうして？」

ここまで言っただけならわからないもんかね。

「はやてのためだよ。それ以外のことなんて俺にはどうでもいいことだよ。」

だから大学を出た今はもうそういうことをやるつもりはないんだよ。俺の願いははやてと一緒に幸せに暮らすことだからね」

うわー自分で言っただけで、自分の姉に言うことじゃねえな。ちよつと鳥肌が……

「シスコン」

「グッ！」

言われると思ってたけど実際に言われるとかなりきついな……

「でもありがとうな。そんなに大事に思ってたってくれて」

「当たり前だろ？はやては俺の立った一人の家族なんだから」

「うん」

いやいや、はやてよ。なぜそこで少し残念だなんて顔した？
そこは普通喜ぶところじゃないのか？
まあこの話題に触れないようにしよう。

「そうだ。俺、久しぶりにはやての料理が食べたいな」

「そうか？じゃあまず買い物行かな。今日は豪勢にいくで！」

そして俺たちは買い物に出かけた。

店に着いて色々選んでいたらはやてが突然なにかを思い出したかの
ように、話しかけてきた。

「ごめん、隼。私家に財布忘れてもうたわ。一回家に戻らな」

「ははは。相変わらずはやてはどっかぬけてんな」

「むう……。そんなこと言うんやったらご飯作ってあげへんで？」

「ご、ごめんはやて。そんなこと言わないでよ。俺かなり楽しみに
してたんだよ」

むこうじゃ和食食えなかったからとくに楽しみだったんだよ。マジ
で勘弁してくれ。

「しょうがないな。そこまで頼むんなら許したるわ」

「ありがとう、はやて。あとお金のことは気にしないでいいよ。俺が持つてるから」

「そういえば、さっきもお金持つてる言つてたけどどれくらいあるん？」

フハハハハハ！聞いて驚け！！

「贅沢しなければ一生暮らせるくらい。特許も取ったからこのまま行くと第二のビル・ゲ。ツだな」

「いやいや、どこの小学生がそんなことできるねん」

まあそう思うよな。でもこの世界じゃ余裕だったぜ？チートの頭脳マジハンパねえッス。

「まあ俺がこの世界でイレギュラー級の頭脳を持つただけだよ。それにほとんど個人開発で技術売ったから金が貯まるのも当たり前だよ」

「もうあんたに突っ込んだら負けな気がするわ」

俺もこんな奴が自分の世界にいたら嫌だな。

その後俺たちは買い物も終えて家に帰り、久しぶりの家族でのひと時を過ごした。

主人公設定（前書き）

先ずは謝罪を。

更新が遅れて大変申し訳ありませんでした。

ホントはもう少し早くするつもりだったんですが、なんか変なことになって一回消して書き直しています。

日常編を入れようと思ったんですが、俺には書けませんでした。o

r
z

つうわけで次回から無印開始のため、主人公の設定集です。

ではどうぞ） ・ ・ （ つ

主人公設定

名前：八神 隼やがみ しゅん

年齢：8歳（小三）

『前世は享年19歳』

身長：140cm（小五の平均ぐらい）

体重：38？（小五の平均ぐらい）

頭髮：綺麗な白（特徴が無い黒がいやだったから能力を使って白くした）

肌：綺麗な白（同上）

瞳の色：紅（同上）

基本的に顔の作りは幼い頃のアクセラレータで、目つきはそれよりも優しい感じ

体はそこそこ鍛えている。

ついでに成長ホルモンを変な影響が出ない程度にいじっているため、その年のわりには大きい方

言葉遣いは昔は家族の前では関西弁（エセ）だったが、留学していたときに標準語に直したとはやてに言った。
今ではずっと標準語。

性格は、二度目の生のため基本的に自己犠牲。
はやてに対してだけかも。

つつか他の人から見たら完全なシスコン。でも本人は気付いてないし、言われると全力で否定する。

スベックはこの世界の魔力ランクはE〜Dくらい。

それ以外の、魔力、気、霊力、その他諸々はチートレベルだけどもだ使いこなせていないため、基本的にいつも全部封印している。でも幽霊はいつも見えている。まあ基本無視。

普段は普通の小学生が太刀打ち出来ないぐらいの強さ

特殊能力や道具で解放されてる個数は10個

？：アクセラレータの能力と頭脳

？：インデックスの完全記憶能力と103000冊の魔導書の知識

それ以外はまだ出てきていないので出てきたら後書きに書いておきます

今はこれくらいですね。

第七話（前書き）

遅くなりました。

前回から結構間が開いてしまっ
て申し訳ないです。

あと今回も後書きに補足があるので
読んでいて下さい

ではござい（ ・ ）っ

第七話

どうも皆さんこんにちは。

八神隼です。

俺が日本に帰ってきてから約一年が経ちました。

いやあ、一年が過ぎるのって結構早いですね。

俺は小学校なんてもんには通っていませんが行っているとしたら今年で三年生ってことになります。

この一年は結構平和に過ごせました。

ただどこで聞きつけたか知らないがどっかの企業の勧誘が月に、最低でも二社、多いときは五社ほど来ました。まったく迷惑な限りです。

しかも来るのはいいんですが名前と住所しか聞いていないらしく（まあ俺が素性を明かさなかったからせいだが）、俺だっつっても流しやがって親を出せって言うてなかなか手に負えませんでした。（

、

まあ最後は国家権力に頼んで不法侵入と名誉毀損でしょっ引いてもらいましたけど。ざまあねえな。

それ以来誰も来なくなりましたけどね。（＾０＾）

あと俺とはやてはいつも一緒に行動してます。

はやてはいつのまにやら本の虫になって、図書館に通うようになってました。

やっぱ一人にさせるんじゃないかな……

そしてはやては料理がメツチャ上手くなって感動しました。思わず泣きそうになってしまいましたよ。

え？なんでいきなり近況を話してんだって？

現実逃避だよ！！

なんだよ！あの化け物！！

なんか助けてって声が聞こえたから来たら、喋るフレットと同年ぐらいの女の子が怪物に襲われてる場面に遭遇してビックリだよ！！

つつわけで回想行きます。異論は認めん。

この日俺は珍しく夢を見た。
なんか同じ年ぐらいの男の子が変な怪物と戦ってしかも負けてる夢だった。

しかも最後には「誰か……助けて……力を貸して……」とか言っ
て倒れやがった。

夢だったら敵を軽くなぎ払えよ。全く寝覚めが悪い。

そして俺は体を起こそうとしたが何かに掴まれているようで上手く
起き上がれない。

隣を見るとはやてが幸せそうな顔をして抱きついていて。

一緒に寝るのは許可した（というか命令されたに近い）から同じベ
ッドで寝るのは、まだ許容範囲だ。

え？アウトだつて？まだ八歳（かぞえて九歳）だからセーフです。
誰がなんと言おうとセーフです！

だが！だがしかし！こんな風に抱きつかれるのはたまったもんじゃ
ねえ！

そんな幸せな顔して抱きつかれてると、ロリに目覚めちゃうじゃな
いか！！

まして俺は義理（はやてにはまだ教えてない）とはいえ、姉に手を
出すようなウンコクズになるつもりはないんじゃない！！

おっと、思考がそれたぜ。

つつか早く起きてくれるか、離してくれよ。

早く朝飯作らないとどうせ後で怒られるんだから。

しかも自分の所為なのに。理不尽だ。

「はやて〜起きてくれよ〜」

「うつゝん」

やっぱり起きねえし。いいやもう強引に出てやる。起きててももう知らん。

「ごめんね、はやて」

よし、やっと出られた。いつもよりもちょっと遅いな。クソ。あの夢もあつて今日はまったくついてないぞ。

そしてその後は朝飯が遅かったって怒られてしまった。つうかお前の方が料理上手いんだからお前が作ってくれよ。朝は寝てたいからって俺に丸投げしやがって。

そしてその後はいつもどおりに図書館に行つて本を読んで一日が終わると思つてた。

その日、晩飯を食べた後少ししたら夢に出てきた少年の声で「助けて下さい」って聞こえてきた。

どうやらこの世界の魔法かなんかなだろう。まったく面倒だな。しかし無視するのはなんか嫌なんだよな。こんなもんが聞こえてきたら行かないわけにはいかないからな。

しょうがない。

幻覚を使つてはやてを騙すしかないかな。
なんか気が引けるが仕方ないな。

「グーフォ・ディ・ネツビア。幻覚を頼む（ボソツ）」

そして俺は家を出て、声の聞こえて来る方へと向かっていった。

回想終了

来なきゃよかった。

なんか俺の知識にないベクトルを感じるからこれがこの世界の魔法の力なんだろ。

ヤベエ。あの怪物相手に無双出来ないかもしれん。

つつかこれ一期だろ。

マジ来なきゃよかった。来なくても成功した筈だし。
でもな〜

「君たち（・・・）には力がある！」

見つかったちゃって巻き込まれちゃったんだよ！！
なんだよこのネズミは！！

そんな事言われて手伝うと思ってるのか！？

「そんなことはどうでもいいの！」

そうそう。そんなことはどうでもいいの。
よくわかってるじゃないかお嬢ちゃん。

「どうやってたらあれを止められるの！？」

そう、どうやってあれを止めるか……

「って違うだろ！！？」

お前はバカか！？

「ふえ！？いきなりバカなんてひどいの！」

「いやどう考えてもバカだろ！」

普通に考えて何の訓練もしてないのにどうにか出来るはずないだろ！
ここはこのネズミを罠にして逃げるのが普通だろ！」「ネズミじゃないです！

僕はフェレットです！」

「お前明らかに突っ込むところ違えぞ！？」

どうしよう！！これだと明らかな原作介入コースだぞ！？
キャストもストーリーも知らない俺に何が出来んだよ！？
わかるのはこいつらが明らかな原作キャラだらうってことだけだ！

つつか冷静に考えるとこの女の子、無謀にも程があるだろ。
やっぱりそこは主人公（？）補正なのか？
もういいや俺は勝手にやってやる。

「おいネズミ、人に頼ったんだから解決策は用意してあるんだろうな？

無かったら焼いて食うぞ」

「あ、あります！

これを使つてあのジュエルシードを封印出来ます」

「ネズミ、呼びにくいから名前を教える。

あとそれ使うなら魔力が高い方がいいだろ。どっちが高い？」

まあ俺は主人公クラスに勝てるほど魔力持っていないのはすでに知ってるんだがな。

「僕の名前はユーノです。

あと魔力はそちらの女の子の……」

「なのはだよ」

「なのはの方が高いのでこれを」

そう言つてユーノがなのはに赤い宝石を渡す。
つかお前ら、あの変な怪物がいること忘れてないか？

まあおれがテレキネシスを使って抑えてるからいいんだけどさ。

「僕がいう言葉を復唱して」

「う、うん」

「ていうか俺帰ってもいいですか？」

だって今ならなんとか引き返せそうじゃん？

俺はこの世界の目標は、はやてを幸せにする事だからな。

ここで残ったらもう引き返せないだろうしはやてを巻き込みかねん。

「ダメです！

まだここは危ないのでそこにいてください！

後で説明しますから！」

テメエこのネズミ、もうユーノとは呼んでやらん。

しかもそれだと俺はこの世界での力も無いのに巻き込まれんのかよ。
まったくやってられん。

そんな事を考えてたら二人が詠唱を始めやがった。

これで封印出来んのかな。

あれ？でもあの怪物の方を見てないぞ？

つつかお前らさっきまで襲われてたのにホントにのんびりしてんな。

そして詠唱が完了したと思ったら、なんかなのはが光に包まれて光が消えたら変身していた。

「……………は？」

いやいやいや、なんで変身してんの？
今の攻撃呪文とかじゃなかったの？

「グオオオオオー！！」

ドガアアアアーン！

「ガッ！？」

しまった！！

ついテレキネシス解いちまったじゃねえか！
つつかやっぱり反射出来なかったし……
それより腹に違和感が……

「キヤアアアー！！」

「だ、大丈夫！？」

なんだお前らウルス……………

ダメだ…腹にこんな大きな穴空いたら血流操作でどうにかなるもん
じゃねえ。

もう無理だろ……

「わりい…はやて…
俺死んだかも…」

そして俺の視界は真っ暗になった。

オイオイオイ。

これいつかの死後の世界だろ。俺はまた死んだのか。

クソッ！！俺ははやてを悲しませるためにあの世界に行ったのか？

何をやってんだ俺は……！

「なんじゃ、またここに来たのか。

そんなにあの世界は嫌だったのか？」

「好きでこんなところに来たわけじゃねえよ！

お願いだ！お願いだから生き返らせてくれ！！」

「無理じゃ」

「お願いだよ……俺はもう…はやてを悲しませたくないんだ……」

「お願いします……」

「そんなに頼まれても、無理なもんは無理じゃ。

今はあのフェレットのおかげでギリのギリで生きとるからな」

「マジで言ってるのか……？」

腹にあんな大穴空けられたのに？」

「まあ、あと一、二分も持たんじやろ。

今は仮死状態じゃ」

「じゃあすぐアイテムよこせ！それで復活する……！」

「何がいいんじゃ？」

「ドラゴンボールの仙豆だ……！出来るだけ多く……！」

「あいわかった。それではお主ももう戻れ」

そして少年はそこから消えた。

「まあホントはワシがやつとつたんじゃけど……」

まあ生き返らせたわけじゃないしいいか」

そして笑っていた老人もそこから姿を消した。

「死なないで！死んじやいやなの！！」

「クッ！血が止まらない……！」

このままじゃ……！」

ああ、このネズミのおかげで助かったのか……

クソ…腕が動かねえ……

そうだ！テレキネシスで！

そして俺は自分の横に落ちている袋から仙豆を取り出して自分の口に入れた。

すると傷口が忽ち塞がっていった。

「あゝ死ぬかと思った」

そう言いながらむくりと起き上がる。

「よかった！治ったんだね！？」

「ウソだ…あんな傷がそんなすぐに治るなんて…」

僕の回復魔法じゃ回復しきれないはずなのに（ブツブツ）

おいお前。たしかなのはって言ったか？

いきなり抱きつくなよ。微妙にタツクルっぽくて少し痛かったじゃないか。

それとネズミがなんか言ってるな。

「おいユーノ。なんか言いたいことあんのか？」

「えっと…僕の魔法じゃ治しきれないと思ったのが急に治ったからどうしたのかなって……」

ああ、こいつら俺が仙豆を食ったの気付いてなかったのか。
それなら余計な説明をしなくてすむぜ。

「お前が治せなかったら誰が治せるんだよ。」

お前は俺の命の恩人だよ」

「そ、そんな事ないよ……」

「そう。そんな事ない」

「え？」

「俺は言っただよな？」

俺には何の力もないから逃げた方がいいんじゃないのかって。
でもお前は逃げる方が危ないからここにいろって言ってるのはと
んか詠唱始めて怪物から注意を逸らした。

その結果がさっきの俺だ。

俺が死にかけたのはお前の所為。俺が治ったのもお前のおかげ。

それでチャラにしてあげてもいいんだけどすっごい痛かったんだ
よね。

話聞かせてもらえるかな」

「はい……」

落ち込んでるな」

ホントは俺の不注意もあったんだけど、話を聞くにはこうした方が

楽だしな。

あと後々こき使ってやる。

「じゃあ一回移動するか」

「え？どうして？」

「いや、この場にいたら色々聞かれるだろ。

それと耳を済ませてみる。

パトカーのサイレンが聞こえるだろ？

早くここから逃げるぞ」

「う、うん。わかったの」

そうして俺たちは近くの公園に入った。

「さて、ユーノ。お前にはさっきのやつについて説明してもらおうか。

内容はぼかすなよ？いくら難しくても俺には理解できるから。

……なのは知らないが」

「ちよつとひどいの！

それよりあなたのお名前は！？」

ヤベエ。主人公（？）に名前なんか教えたら巻き込まれんのが決定しちまう。

こうなったら偽名を使うか。そうだ前世の名前を使えばいいんだ。

「そういえば自己紹介がまだだったね。」

俺の名前は桐島大輔。きりしまだいすけ

君は？」

「私は高町なのは。」

聖祥大付属小学校の三年生です。よろしくなの」

「いやいやいや、よろしくしねえよ」

「え！？どうして」

こいつやっぱバカだ「バカじゃないの！」

こいつも心読めんのかよ。メンドクセエな。

つつか普通に考えて何の力もない俺を巻き込むのか？

お前、魔王で鬼畜だな。

「さっきの見てなかったのか？

俺は死にかけただろう。

その俺がなんで何の力も持っていないのにわざわざ戦うんだ？」

「ユーノ君！レイジングハートみたいなデバイスもう一個ない！？」

おいおい。お前はそこまでして俺を巻き込みたいのか？そんなに一人がイヤならお前も手伝わなけりゃいいのに。

それとユーノ。ご都合主義という名の下にそんなもの出したらお前を八つ裂きにしてやる。

「ごめん。なのは、大輔。

他には無いんだ。」

「そっか……」

「いやいや、俺は最初から参加する気ねえよ？

俺をいちいち巻き込もうとしないでください」

「わかったの……」

よかった……まだ巻き込まれるフラグは立ってないようだな。
あとそこでご都合主義が発動しないのがマジ嬉しい！

「じゃあユーノ。さっきのについて説明してもらおうか」

「うん。あれはね……」

説明中

「あれは魔力の塊で、何かの願いをかなえるものでいつ暴走するか
わからない。

そして残りは19個ある」

「はい」

「つつかこの世界に喋るフェレットなんかいたんだ」

「いえ。僕は違う世界から来ました」

What?今こいつなんて言った？

違う世界から来たって言ったか？こいつも俺と同じように平行世界
から来たのか？

平行世界が関係するアニメって……

「それって平行世界ってこと？」

「平行世界？いいえ違いますよ？」

「僕が来たのはこと違う次元世界です」

……次元世界ってなんだ？

俺の記憶にヒットするものが思いつかないんだが……

「何それ。」

俺をバカにしてるわけじゃないんだよな？

もしそうならお前はカラスのエサに決定だぞ」

「バカにしてるわけじゃないです！

次元世界っていうのはですね……」

説明中

「まあ大体わかった。」

あと話を総合すると俺はお前がやつちやいけない事をした気がする」

「え？それって……」

「お前はこの管理外世界において何も知らない一般人に魔法のことを教えてよかったのか？」

「あ……」

いや、今気づくのかよ。

これは「知られたからにはこっち側に来てもらいます」とか「知られたからには生かしておけません」とか「記憶を消させてもらいます」とかするのか!?

「……俺は何も見えてないし何も聞いてないから。

俺は今後一切関わらないので失礼します。さようなら。もう二度と会わないことを祈ってるよ」

なんか後ろの方で何か言っていた気がするが俺は気にせず走りつづけた。

でもこれで回避出来た気がしないのはなぜだろうか。

そして色々なことを考えながら走っていたら自宅の前に着いた。

あれ? もうはやてはいつもは寝てる時間なのに電気が付いてるな。

そんな事を考えながら玄関のドアを開けるとそこにははやてがいた。

………しまったあ!

一回仮死状態になったときに幻覚が消えたのか!?

それだと勝手に家を出た事がばれちまう! つつか服が血塗れのままじゃねえか!! もう誤魔化しようがないじゃないか!?

「隼。どこに行つて……」

「なんや！？その血塗れの服は！？あんた一体何してきたんや！」

「えゝとこれにはやむにやまれぬ事情がありましてね？」

「それは大丈夫なんか！？」

「大丈夫。完全に治つてるよ」

「治つてるつて事はやっぱり怪我してたんやな！？いつたいどこで何してたんや！！」

急に隼がいなくなつて……わたしがいつたいどれだけ心配したと思つとるんや！！」

どうしよう……本当の事を教えるとはやてにもあとで迷惑がかかるよ
うな気が……

「あんたが嘘ついてるかぐらひは区別出来るんやから言い訳なんて
せんで何があつたか言い」

「仕方がないか……」

はやて。今から俺が言うことは全て事実だから、覚悟して聞いてね」
「わかつた」

そして俺は今日有つたことを全て話した。

「で、あんたはその声に呼ばれて行つたら怪物に腹に穴開けられて
死にそうになつたら、隼を呼んだフェレットが傷を治したと。
簡単に言つとこんな感じか？」

「そっだよ」

俺の能力のことを話さなくてよかったぜ。

「じゃあなんでいきなりわたしの目の前から消えたん？」

そっだよ……幻覚消えてたんだ……

しょうがない。これだけは正直に話すか。

「わかった。詳しいことを教えるよ。」

でも今日はもう遅いから明日にしよう」

「じゃあないわ。」

でも嘘は言うんやないで」

「わかった。じゃあ俺は風呂に入ってくるから先に寝てて」

「お願いやから隼はどこにも行かないでな？」

「ごめんね、はやて。」

こんなに心配させちゃって……でも大丈夫。俺はどこにも行かないよ」

そんなに泣きそうな顔にならないでくれよ。

そして夜は更けていった。

第七話（後書き）

ボックス（すいません携帯だと変換出来ませんでした）兵器

by リボーン

基本的に全てのボックス兵器とリングがあります
因みに波動は7つ全部です
強さは全て雲雀並みにあります

テレキネシス

by グラナ PSYREN

補足しますとグラナ並みのライズも使えます

仙豆

by ドラゴンボール

外傷だけなら全て治す
数は百個ほどあります

今回は以上です

一週間に一回は更新するように頑張ります

ではまた次回

第八話（前書き）

なんかうまくできてる気がしない……

あと後書きに補足があるんでまた見といて下さい

ではどうぶつ（ ） ・ （ ） つ

第八話

俺がこの世界の魔法使いに出会い、死にかけた日から一夜が明けた。

そして俺はひとまず説明を終えた。

そして俺の能力については幻覚が使えるってことだけを話した。

「今までなんで隠してたん？」

「いえ…その……なんていうか……」

普通に考えてそんな事を教えるわけ無いだろうに。

まあはやてに気味悪がられたくないってのもあったかな？

「早く言い？今ならまだ怒らんから」

「正直嫌われると思ってたんだ。」

こんな普通じゃない力があってもこの世界じゃ何の役にも立たないし、はやてに嫌われたらイヤだと思ったから……」

「隼、歯食いしばりい」

「え？」

スパァン！

「隼はわたしのたった一人の家族なんや！！」

わたしはそんなこで隼を嫌いになつたりせえへん！

わたしが嫌なんはわたしにも相談せえへんで一人で抱え込んだことや！！

少しはわたしを信用してや！」

「ごめんね、はやて。

ありがとう」

まだ隠し事はあるんだけどそれだけは絶対に言わない。いや言えない。

言ってしまったらはやてが普通の女の子として生きられなくなる。

「じゃあ話も終わったことやし、今日は検査の日やから病院に行くで」

「うん、わかった」

そういえばはやての病氣って何なんだろう？俺のキュアでも治らなかったし……

そうするとまだ発見されてない病氣なのかな？早く治療方が見つかるといいな……

そして俺たちは病院へと向かった。

そして検査の結果はいつも通りで横ばいだった。

はやてがむくれていたがこれはさすがにしょうがないことだ。

その後俺たちは夕食の買い物のためにデパートにやって来ている。

「そういえば、最近たまに思っんやけどわたしってヒモみたいやね」

こいつはいきなり何を言い出すかと思えば……

「俺たちは家族なんだから当たり前だろう？」

「まあそうなんやけどな」

「俺は例えるとしたらそれよりも夫婦のほうが合っと思っんだけどな」

「ぶふっ！」

い、いきなり何を言い出すんや!!」

なんだ？そんなに顔を赤くして。

ああ。公衆の面前でそんな事を言われるのは流石に俺も嫌だな。すまなかったなはやて。

「ま、まあええわ。

そんな事より将来の隼のお嫁さんになる人は羨ましいなあ。

なにせ家事は万能やし、料理だって色々作れてどれも美味しいし、子供なのに大学出るくらいに頭いいし、運動神経だってええし、顔だって悪くないし。

何よりももう仕事しなくても暮らしていける位にお金持ってるからずっと一緒におれるだろうし。

あかん！優良物件過ぎるやないか！？

姉弟じゃなかったらわたしが結婚したいわ!!」

そうだ。はやてにはまだ教えてないんだよな……
教えたらどんな反応するかな？

「ははは。そんなに誉めたって何も出ないよ？」

「何や、謙遜せんのかい」

「顔のことはおいておいて、それ以外は全部事実だからね。それに俺が謙遜したら逆にこの世の中の他の人たちを否定するようなものだからね。」

真に実力がある人が謙遜したところでただのイヤミにしか聞こえないよ」

「うわ…なんて傲慢な考えなんや」

「ははは。そうかもね」

因みに俺は世界各国の料理が作れるし味も自分で言うのも何だが旨いと思う。

だがはやては作れる種類こそ俺よりも少ないものの、味の質は俺よりも高い。

なにせ一回作り方を教えただけで俺よりも旨く作れるから自信を碎かれそうだった。

まあもともと料理の才能はあんまりあつたもんじゃないし、完全記憶能力だから仕方ないっちゃ仕方ないんだけどな。

そして俺たちは色々な話をしながら、買い物をした。

そして帰宅してからはやてが晩飯の支度をしている時、俺がだらけていたら（役割分担をしているだけではやてに丸投げではない。けっして丸投げではない！大事だから二回言ったぞ！！）はやてが声をかけてきた。

「隼。今日ご飯にしようと思ってたんやけど、米無くなっとったの忘れとった。」

悪いんやけど買ってきてくれへんか？」

「あれ？そうだったっけ？じゃあ買ってくるよ」

「悪いなあ。重いだろうけどよろしくな」

「じゃあちよつとまってるね。」

「じゃあいつてきます」

「いつてらっしゃい」

そして俺は家を出た。それが俺に再び不幸をもたらすことを知らずに……

そして俺は近くの米屋に向かっていたが……

いやいや……おかしいだろう。なんで俺はこんなにトラブルに巻き込まれるんだ。

こんな不幸体質は○条さんの専売特許のはずだろう。

それというのも、米を買いに行く途中に近くでジュエルシードが発動してしまった。

しかも近くから悲鳴まで聞こえてきた。

ちくしょう。なんで俺の近くで発動すんだよ。なのはとユーノの近くにしろよ。

そして俺は神社の階段を一気に飛ばして境内に入った。
そこで見たのは……

「グオオオオ!!」

明らかにこの世の生物には見えないが、たぶん基が犬だろう。つつか横に人(たぶん飼い主だろう)が倒れているし逃げる事ができねえじゃねか。

「まったく。寝てろ、このくそ犬が!」

バチバチバチ!!

そして俺は電撃をぶつ放して、犬を気絶こそしなかったものの行動不能には出来たようだ。

さてと、あれが動けないうちにこの人を連れて逃げるかな……

「だ…大輔…今のつて……」

Ya…Yabeeeee!!!

見られた！？今の見られてたのか！？

このあとどうしよう！？つか誤魔化しようがなくなね！？

これ、絶対に巻き込まれるルートだね！？しかも自業自得だから誰も責めようがねえじゃん！！

よし！ダメもとだけど逃げるか！

「じゃ！俺は失礼するよ！それじゃあね！」

「ちよつとまつて！！」

フハハハハ！！誰が待つか！！

ギイン！！

あれ！？前に進めないぞ！？

そして後ろを振り向くとネズミのヤロウが、たぶん魔法なんだろう、それで作り出した鎖で俺を縛っていた。

そんなことをしても俺にはそんな趣味はないから全然嬉しくないんだが……

「あの〜ユーノ君？僕はなんで縛られてるのかな？」

早く帰らないとはやてにも怒られるんだが……

「大輔！君が逃げようとするからだよ！
とゆうか君も魔法を使ったの！？」

「エ？ナンノコトデスカ？」

「なんでカタコトなの？」

「ソンナコトナイヨ？」

「ま、まあいいや。それよりもさっきの電撃すごかったね！何で昨日は教えてくれなかったの！？」

「ナンノコトカヨクワカラナインデスケド？ミマチガイジャナイデスカ？」

バカヤローー！！んなこと教えてたまるか！！俺のスキルはチートだからな！！説明なんかできんわ！！

「大輔くん、デバイスなくても魔法使えたんだね！？一緒にやろうよ！……」

このヤロウ！さっきまで空気だったのに！余計なこと言いやがって！！

「俺は魔法なんて使ってませんから。俺はお使いの途中だったんで帰らせて下さい。お願いします」

「じゃあなんで魔法も使えないのにここにいて、ジュエルシードの暴走体も抑えるなんて、どうやったのさ？」

このクソネズミめ！！！どんどん逃げ道を塞ぎやがって！！もういいや嘘教えてやる！！

「しょうがないから教えてやるよ」

「ホント？」

「さっきのヤツはたしかに電気だ。でもそれは魔法かどうかなんて知らん」

「え？どうして？」

「てめえのせいだよ、クソネズミ。俺が死にかけて復活したらなんか頭に違和感を感じてて、少し試したらなんか電気出るようになったよ」

まあ嘘なんだけどな。

罪悪感？何それ？美味しいの？

「あ…ごめんなさい」

「わかればいいんだ。じゃあ俺はもう帰らせてもらうから」

「ちょ、ちよつと待って。ジュエルシードを集めるのを手伝ってくれないかな」

は？こいつなに言っちゃってんの？俺はそんな事したくないんだけど。

それになんかこいつら嫌いだし。

いちいち他人のプライベートまで首突っ込んでくんなっての。

あ、でもはやての近くに出たら大変だしな。

しょうがない妥協案ぐらいだしてやるかな。

「わかった。そこまで言うなら手伝ってやる」

「ホント!？」

「ただし!!俺の周りに被害が及ぶ時だけだ。それ以外のときはそんな面倒くせえもんの手伝うつもりはない。

あとお前から俺には連絡すんな。手伝うときだけ俺から連絡する。行動を縛られるのは嫌いなんだ」

常にはやての近くにいてやりたいからな。

「うん!これからよろしくね!」

はあ、だりい。つつか結構時間経ってね?

「じゃあ俺はお使いの続きがあるんで失礼するよ」

「うん、じゃあね」

さつてと。どうせ帰ったらはやてに怒られるんだろうな。

なんかそう考えると帰りたくなってきたな。

でもそうするとはやてがまた泣くだろっし……

いいや。素直に今回も巻き込まれましたって正直に言っかな。

そんなことを考えながら米を買い家路に着くのだった。

第八話（後書き）

キュア

b y P S Y R E N （ヴァン）

心臓と脳以外なら元通りに出来る
因みにリンカーコアはまだ構成を知らないから出来ない

電撃使い（エレクトロマスター）

b y とある魔術の禁書目録 （御坂 美琴）

最高十億Vの電撃を操る

さらに磁力も使えるし、目で電気の流れも見える

今回はこんな所ですね

能力や道具は残すところあと4つです

一応決まっていますんで待っていてください

ではまた次回

第九話（前書き）

ヤバイ。最近リアルがヤバイ。

英語が出来なすぎて今年の受験のためかもしれん。

てなわけでまたまた現実逃避しながら書きちゃった。
てへっ f (^ _ ^)

まあそんなことはどうでもいいや。
この作品を楽しんでくれたら幸いです。

一応今回も後書きに補足が入ってますんで見といて下さい。

ではどつぞ (. .) つ

第九話

あの日は帰ったならなんか家の中から覇気っぽいものが出ていた。
そして案の定、俺は怒られた。物凄く怒られた。覇気が出てたから危うく意識が飛ぶところだった。

つうかなぜはやてが霸王色の覇気を使える？王の素質でもあるのか？
女王様なのか？そんなのマジで勘弁して欲しいんだが。

そしてその後にまた巻き込まれたと言ったらはやては少し許してくれた。

そしてその後はとくに何も変わったことは起きずに日曜日を迎えた。

今日は朝から図書館に行き、外で昼飯を食べた後、夕食の買い物のために商店街に買い物に来ていたのだが……

ゴゴゴゴゴゴ！……

「なんや！？じ、地震か！？」

すさまじい地響きではやてがパニックになってしまった。

周りの人たちもなかなか慌てている。

しかしそんな中俺は溜息しか出てこない。

なぜなら……

「こんな街中でジュエルシード発動すんなよ」

そうジュエルシードが発動したのだった。

はあ。マジで最近〇条さんバリに不幸体質だな。
もういつそ叫ぶか？

そんなことを考えていたらだんだん地響きが近づいて来る。

「はやて。悪いんだけど俺がいつも巻き込まれてるのが発動したっ
ばいから俺はちよつと行ってくるよ。
はやては逃げてて」

「で、でも…」

「大丈夫だよ。怪我しないようにするからさ」

「わかった。約束やで？絶対に怪我せんで帰ってきてな？」

「うん、わかったよ。終わったら携帯に連絡入れるからね？」

「うん。ホントに気をつけてな？」

「うん。はやても人の波に巻き込まれないように気をつけてね」

「またあとでな？」

「それじゃあね」

そして俺ははやてを逃がしたのはいいが、まだ事態がそこまで把握
できてないので近くのビルの上に、ベクトル操作を使って上って行
った。

そしてビルの上から見ると、大きな木が凄いスピードで成長していた。

しかも根がこっちにも伸びてきていた。

しょうがない。念話してやるかな。（念話は簡単だったのですでに会得している）

『おい、ユーノ。聞こえるか？』

『大輔！？うん聞こえてるよ！』

『お前この木どうにかできるか？』

『ごめん。多分少し時間がかかると思う』

はやてが巻き込まれそうだから今回はそんなに悠長に待つてられないんだよ。

しょうがねえ、あれ使ってやるかな。

『ユーノ。俺が今からあの木をどうにかするからお前となのはで封印しとけ』

『え！？ちょ…』

なんか言いかけていたようだが知ったこっちゃない。急がないとはやてにまで被害が及ぶ。

そして俺は指輪を発動させた。

「デイメンションARMジッパー！」

そして発動させると空間に歪みを発生させその中に手をつ込んだ。
そして歪みから手を出すとその手には指輪が握られていた。

「よし、いくな。」

ガーディアンARM枯れ木の鳥！
ブライディングバード

そして俺が握っていた指輪が光り輝き、次の瞬間にはそれがなくなり、近くには枯れた木で出来た、鳥のようなものが現れた。

「行け、ブライディングバード。あのクソデカイ木を枯らしてこい」

俺が指示を出すとそれは大樹に近付いて行く。

勿論木の方も迎撃しようとしてくるが、如何せん相性が悪すぎる。
迎撃に使った枝や根が根こそぎ腐らされていく。

そして遂にそれは木の中心部に近づき、ジュエルシードで暴走した
木を全て腐らせ切った。

そして俺はユーノに念話を入れた。

「おい、ユーノ。」

木の方は終わったからジュエルシード、しっかり封印しとけよ？』

『ちよつと待つて!!』

さっきのは何!?!』

『俺は今協力者だが仲間じゃない。この街は俺の大事な家族がいるから守る。』

だから俺はお前らがこの街を少しでも傷つけるなら俺はお前らを潰す。そして最悪殺す。』

だから必要以上に情報はやらん』

そんな事を教えられるか。

この前の話に出てきた管理局の奴らにロストログア認定されかねん。ARMなんてのは明らかにオーバーテクノロジーだからな。

それよりもジュエルシードはしっかり封印出来たみたいだな。

『じゃあユーノ。念話切るぞ』

『ちよ、ちよつと待つて!』

なのはが君と話したいって』

『あいつと話すのはダルいからお前から言っとけ。』

じゃあな』

『え、ちよ!?!』

なんか言いかけていたが俺は問答無用で念話を切った。

つたく。あいつらはなぜあんなに他人に構うのかね。

あれがああの年頃では普通なのか?

まあそんなこと考えてもしかたないか。はやてが心配してるだろうから早く迎えに行つてやらなきゃ。

『もしもし、はやて？今どこにいる？』
『隼！？大丈夫やった？怪我とかしてへんか？』
『ははっ、そんなに心配しなくても大丈夫だよ？』
『いや、前例があるもんやから……』
『う…：そういえばそうだったね。心配かけてごめんね？』
『いや、無事ならえんよ。じゃあ帰りに買い物続きして帰ろ？』
『了解。今からそっちに向かうからまっててね』

そして俺はベクトル操作で強化したスピードで街を駆けていった。

s i d e c h a n g e

s a i d e なのは

「いろんな人に、迷惑かけちゃったね」
「え？」
「な、何言っただ。なのはちゃんとやってくれるよ」
「わたし、気づいてたんだ……あの子が持つてるの。」
でも、気のせいだって思っちゃった。
それにあの子にも迷惑かけちゃった」
「なのは。お願い、悲しい顔しないで。元々は僕が原因で……
なのははそれを手伝ってくれてるだけなんだから。」

なのは！なのははちゃんとやってくれてる！」

魔法使いになって初めての失敗。

自分の所為で誰かに迷惑がかかるのは、とても辛い……

そう思ったからわたしはユーノ君のお手伝いすることに決めて……

自分なりの精一杯じゃなく、本当の全力で……

ユーノ君のお手伝いではなく、自分の意思で、ジュエルシード集めをしようと思いました。

もう絶対……こんなことにならないように。

あの子にも、もう迷惑をかけないように。

第九話（後書き）

A R M

b y M A R

基本的に全てのA R Mがあります

因みに魔力やらシックスセンスも完璧でどれでも使いこなせます

ホントチートですね

今回は以上です

ではまた次回

第十話（前書き）

どうもお久しぶりです

つーか待ってた人いたのかな？

まあそんなことは置いといて、今回はちょっとオリジナル入ります

第十話

あの木の暴走の日から数日が経過した平日。

俺とはやてはいつもどおり図書館に来ていた。

しかし図書館に来たのはいいのだが、ついに今日図書館にある読みたいと思える本を全て読破してしまった。

残っているのは小さい子向けの本のみなので正直読む気になれない。つうか読む必要なんかない。

なので正直ここにいてもつまらないのだ。

「なあ、はやて」

「ん？どうしたん？」

「なんか今日暇だからさ、その時間使って今日は俺が料理しようと思っただけどいい？」

「ええけど家にはほとんど食材残ってないで？」

「わかった。帰りに明日の昼までの分は買っとくよ。何か食べたいものある？」

「うーん…これといってとくにないなあ」

「じゃあ適当にバランスのいい食事ってことで」

「うん。それでええよ」

「じゃあ先に帰ってるけど、帰るときにはメールしてね」

「うん、じゃあね」

そして俺は図書館を後にした。

さてと、まずは金を下ろさなきゃいけないんだけど、今日はカード持ってきてないんだよな。

はあ、一回家に帰んなきゃいけないのか。面倒だな。

そう思って家に向かって歩き出したその時、近くの間からジュエルシードの反応があった。

「やべえ。あそこのはほつといたらはやてに危険が及ぶじゃないか。最近の俺はマジで〇条さんバリの不幸体質じゃないか。なぜイマジンブレイカーがないのにここまで不幸なんだ？」

そう呟いてベクトル操作で街を駆け抜けるのだった。

side???

私がこの街についてそうそうにジュエルシードの反応があった。

「アルフ、ついてるよ。さっそく反応があったところに行こう」

「そうだね、早いとこ全部回収してとつと帰ろう」

私は反応の近くに着くなりアルフに結界を頼んだ。

いくら管理外世界だからといっても管理局に見つかる可能性はゼロじゃあないから。

そして反応のあったところの周辺を探しているとジュエルシードにとりつかれたであろう怪物と一人の少年が戦っていた。

いや、一方的に蹂躪しているに近いだろう。あそこまでいけば封印まであと少しだろうと思い、封印したところを掠め取うと思ったのだが、なかなか封印しない。

そうして彼を見ていると彼と目があつた。

s i d e o u t

s i d e 隼

俺は目の前の熊（？）の怪物と戦いながら内心ウンザリしていた。

正直俺一人ならあんなもの簡単に倒せる。

倒せるのはいいんだが、俺にはあの石を封印する術がない。

そのためなのはたちを呼ぶにも何故か念話が通じない。

もう俺もいいかげんメンドくさくなってきたのでこのままこの怪物を昏倒させてから放置して、はやてを連れて帰ろうと思った時、上空になのはとは違う少女がいるのが見えた。

この女の子も空を飛んでいるのならなのはと同じ様にあの石を封印できるだろうと思い、交渉しようと思った。（丸投げとも言つ）

そして俺はこの怪物におもいつきり電撃を浴びせて気絶させる。

「お~~~~い!!!その君!!!ちよつと降りてきてくれ~~~~!!!」

ふむ。なんか怪しまれてるな。まあしょうがないかな。

「お~~~~い!!!俺にはこいつが封印できないんだ~~~~!!!お願いだから手伝ってくれ~~~~!!!」

お、なんか慌てながら降りてきた。

「じゃあ封印よろしくね」

「え？ちよ、ちよつと待ってください！」

「俺、晩飯の買い物に行きたいんだけど」

「ちよつと待ってて下さい。バルディッシュ」

「Yes, sir. Sealing form. Set up. Sealing」

そして俺はこの子が封印しているのを渋谷横で見ていると何かが背後から急接近してきた。

まあ電撃使用の力があるからいくら死角から来ようがかわせるんだけどな。
エレクトロマスター

そしてかわした後、よく見てみると、それは犬耳と尻尾をつけた女の子だった。

いや、犬耳で。コスプレ趣味か？

「お前フェイトになにしたんだい！」

「いや、そんなに怒られても……」

「アルフ！その人はジュエルシードと戦ってたけど封印出来なくて

困ってたんだよ！

それになにより私に敵意を向けてなかったんだよ」

「う……ごめんね。私ついフェイトのことだと周りが見えなくなっちゃまうもんだから」

このコスプレの女の人、アルフっていったか？なんかこっちの方がフェイトよりも落ち着きがないっていうか、明らかにこっちの方が年上だろうにそんな威厳が全く感じられん。

まさに思春期の娘に対する父親の様な……まあどうでもいいか。

「別にいいよ。それより本当に買い物に行きたいんだけど帰っちゃダメ？」

うん、このままだと巻き込まれる匂いがぶんぶんするぜ。

それによくよく考えたら、この世界には魔法使いは存在しないはずだから、こいつに関わるってことは物語に関わるってことになるんだよな。

早く帰りたい……

いや、逃げたい（泣）

「あの、私はちょっと聞きたいことがあるんですが」

なんてこつた。orz

もう逃げられる気がしねえ。

このまま強引に逃げると前回の二の舞になるビジョンが鮮明に浮かんでくるぜ。

もう諦めよう。人間諦めが肝要だ。

「いいよ。なんでも聞いてきなさい」

「じゃあさっきの電気のことなんだけど、デバイスも使っていないの
にどうやってあんな威力を出したの？」

どうしよう。この子が管理局員だったら教えたら面倒だし、教えなかったら教えなかったで面倒なことになるし……
この子が管理局員じゃないことに賭けるか。

「その前に1つ聞くけど君たちって管理局員？」

「いえ、違いますけど……」

よかった。これなら教えてもそこまで問題ないな。

「じゃあ誰にも言わないって約束出来るなら教えてあげるよ」

「……………わかりました。教えて下さい」

「じゃあ教える前に1つ聞きたいことがあるんだけどいい？」

「はい、大丈夫です」

「じゃあ質問するよ。」

君たちの世界には魔法しかああいうことが出来るのではないの？」

「え〜と、管理外世界はわかりませんが管理世界はそうですよ」

神様〜〜！！！！明らかに転生する場所違うでしょ〜〜！！！！？？

こんなにチート持ってたからもっとカオスなところに放り込めよ〜〜！！！！

……いや、こんなにチート満載だとどこでもダメか。

「じゃあ言うつよ？」

俺は君たち魔道士と違って超能力者っていうんだ。

この2つの大きな違いは魔力を使うか使わないか、デバイスを使うか使わないかだよ。

超能力者っていうのは魔力を介さず己の体1つで力を使えるんだ」

「はっ！バカバカしい。そんなもんがあつてたまるかい！！」

「焼くぞ？」

「うゝごめんね。アルフも突っ掛からないで」

うん。やっぱりアルフの方が年上には見えないな。
全く落ち着きを感じられない。

「じゃあ証拠として実演するからよく見ててね？」

「うん」

「じゃあいくよ」

そういつて俺はおもむろに手を上げて、

『バチバチバチ！！』

空に向かって思いっきり放電した。

「まああれは軽く10万V（某電気ネズミの技くらい）ぐらいかな。
本気でやれば10億Vぐらいいくんだけど周りへの被害がばかにな
らないからあんまり使わないんだけどね。

他にも応用は色々出来るんだけど流石に初対面の人にはそれ以上教
えるわけにはいかないんだよね」

そして説明を終えたが二人からの返答がない。

気になって見てみると二人は口を半開きにして呆然としていた。

そして先に復活したフェイトが話しかけてきた。

「す、すごいね。本当にデバイスも魔力も使わないでこんなことが出来るなんて……」

「でもね、これには欠点というか問題点があるんだ」

「問題点だって？」

ようやく復活したアルフが訊ねてきた。

「そう、問題点。」

これは君たちの魔法と違って純粋な物理攻撃だから非殺傷設定だっけ？そういうのが出来ないから必ず相手に怪我させちゃうんだよね」

「そうなんだ」

「そう。だから俺はこの力なるべく秘密にしたいし、人に向けて使いたくないんだ。」

だからこのことは絶対に他言無用だよ？」

「うん。わかった。」

でも私達にも魔力変換資質を持つてる人は同じ事が出来るよ？その変換させた魔力は純粋に物理攻撃になるし」

……え？マジで？

クソッ！あの糞ネズミめ！そのことさえ知ってればこいつには誤魔

化せたじゃないか！

まあ魔力を感じなかったって事でバレたかもしれないが、そんな事はどうだっていい。

でもここまで釘を刺しとけばこの子から誰かに言うなんてことはないだろ。

「じゃあ俺も聞きたいことがあるんだけどいい？」

「うん大丈夫だよ」

「君たちはジュエルシードだったかな？それを集めてるんだよね」

「そうだよ」

「君たちはどうしてジュエルシードを集めてるの？」

「母さんのためです」

ふむ、子供に回収に行かせるなんてヒドい親だな。

これが魔導士として親に認めて貰う試験のようには思えないな。

でもフェイトはその母親を信頼してるみたいだからいいか。

それにもしかしたら親は魔導士じゃないかもしれないからな。

つーかなんで俺はこいつの事で頭悩ませてんだ？

まあいいか。

「母親のためか、母親には生きてる間に甘えたり親孝行しとけよ？」

「え？それってどういう……」

「特に意味は無えよ。」

ただ母さん達の事を思い出しただけさ。

それより本題だが、いいか？」

「う、うん」

「俺はこの街に姉さんと一緒に住んでるんだ。

それで姉さんには俺と違って何か特別な力を持つてるわけじゃないからあのジュエルシードが俺のいないときに姉さんの近くで発動したら困るから、今回みたいに俺の近くでジュエルシードが発動したら俺も手伝うよ。

そんでもう一つは街中で魔法を使わない事。

まあ本当は使ってもいいんだけど使う時は連絡くれ。

もし近くに姉さんといたら逃げるから。

そんで最後にもう一つ、姉さんに怪我でもさせたらお前ら二人を潰しにいくぞ」

「わ、わかった」

「うん、わかってくれて嬉しいよ」

完全に脅しだな、これ。

まあ、はやてのためだからどうだっていいや。

はやては喜ばないかもしれないけど、そんなことは些細なことだし。

「あ、それから言い忘れてたんだけど、このジュエルシードを探してるのが君達以外に二人、いや一人と一匹って言った方がいいのかな？」

まあそれがあるから。

因みに俺が知ってる魔法の知識はそいつに教えてもらったものなんだ。

さらに言うとなんか魔法のことは大まかな事しか聞いてないからどんな事が出来るのかよくわかんないから、その事では怒らないでね」

「私たち以外にもいるの!？」

おお、驚いてるな。つうか微妙に動揺してる？

そんでアルフはなんか俺に敵意を向けてくるし。メンドクせえなこいつら。

「別に俺はあいつ等の仲間じゃないからそんなに睨むなよ。

この間巻き込まれただけだ。因みに巻き込まれた過程は省略。あんなの思い出したくもない。

そんでその時に俺ともう一人の、君と同年ぐらいの女の子と一緒に巻き込まれて、その子の方が魔法の適性が高かったから今はその一人と一匹でコンビ組んでジュエルシードの回収をやってるよ。

まあ俺の方が高くても拒否しただろうけど。

そんで俺は最初に一個持つてるのを聞いて、そんで三回ジュエルシードが発動したとこにいたから、あいつらは少なくとも四個はジュエルシードを持つてるはずだよ」

「そ、そんなにその子たちのことを私達に教えちゃっていいの?」

「別に構わないよ。」

それに俺は姉さんが無事なら君らがジュエルシードを取り合っても気にしないから。

まあどちらかが気に入らないことをしたらそいつの敵になるから。つっても気に入らないことなんて姉さん関係しかないけどね」

「うん、わかった。周りにことは気を付けるよ」

さて、言うことも聞くことももうないな。

「じゃあ俺はもう帰るよ」

「うん。今回は手伝ってくれてありがとう」

「どういたしまして、でいいのかな？」

「じゃあまたね」

その後、俺たちは別れて俺は予定していた買い物に向かった。

なんかめんどくさいようなことになる気がするんだけど……

第十一話（前書き）

大学生の忙しさを舐めてました

超ダリイ

まあサークルにも入ったのがいけないのかもしれないんですがね

あと今回もあとがきに補足がありますんでわからない人は見といて
下さい

ではぶじぶじ（・・・）

第十一話

あれから何日か過ぎて何個かジュエルシードが発動したみたいだけ
ど俺とはやての近くじゃなかったから無視した。

実害がなさそうだったら俺は動かないって言っであつたしな。

その間は普通にはやてと過ごしてた。

なんか普通っていいなって思ってしまったのはなんかへこんだ。

まあそんなことも今の念話でどうだってよくなっただけだな！！

『で、フェイト。もっかい言ってくれるか？』

『う、うん。実はジュエルシードの位置が大まかにはわかったんだ
けど、細かくはわからないから発動する前に強制発動させたいんだ。
だから一応連絡しておこうと思って……』

どーすっかな？なんか任せっきりでもいい気がするんだけど……

あ、でもこの世界の魔法の仕組みを解析するためについてくか。
そうしとかねえと後々困るかもしれないし。

『わかった。一応俺もそっちに向かう。』

今いる場所を教えてください』

そして俺はフェイトから場所を聞き、はやてに事情を言っ（まあ曖昧なことしか言っ（てないが）家を出た。

「さて、ここなら人の目もないから大丈夫かな」

そして俺は『方舟』を用いて転移した。

sideフェイト

「アルフ、これから来るって」

「フェイト、あんな奴待たずに早くやつちまおうよ。そうしないとまたあの白いのに邪魔されちゃうよ」

「大丈夫だよ。まだあの子には負けないよ。」

それに周りに迷惑を掛けないようにするって約束したし」

そつだ。わたしが母さんのために動いてるようにあの子はその姉さんのために動いてるんだ。

その気持ちは何となくわかるから、その気持ちは無碍にはしたくない。

「あれ？」

「?どうしたの?アルフ」

「いや、今思っただけだよあの男の子の方の名前って何だっけ？」

……あれ？

そついえば聞いてないかも。わたしたちのことを普通に名前で呼んでたから気付かなかったな。

「今日、改めて名前聞こうか」

「うんそつだね。なんかあたしただけあいつに名前知られてるってなんか変な感じがするし」

「そついえば名前教えてなかったな」

「うん、そつだよ。……え?」「え?」

「よう。来たぞ」

そこにはこの世界で初めて話した、この前の女の子とは違う意味で白い子がいた。

s i d e c h a n g e

s i d e 隼

「よう。来たぞ」

それにしても、どうすつかな。

こいつは管理局に関係ないっていうか、今んとこ敵対しそうだから教えてもいいと思うんだよな。

でもなんかこいつってなんか抜けてそうだから本名教えたら言っちゃいそうなんだよな。

ま、両方教えておくかな。

「じゃあ俺の名前なんだけど、実はあいつらと関わりたくなかったからあいつらの前では偽名を名乗ってからそっちで呼んでくれる？」

「え？う、うん。別にいいよ？」

「じゃあまず偽名から。そっちは桐島大輔で、次は本名。こっちは八神隼。

正直、本名は誰にも言わないでほしいな。特に管理局にはいわないでね？

もし知られて家のこと知れられても困るから」

「うん。わかった」

「じゃ、ジュエルシードの封印頑張つて。ミスして街に被害出すなよ」

「あんたは何もしないのかい」

「いや、やり方がまずわからんし、俺はそれに対して魔力的な干渉はできんよ。

それに今回来た理由の一つには魔法を使つてるとこ見てみたいなのも入ってんだよ」

まあ、贅沢を言えばなのはとフェイトが魔法を使つて戦つてるところも見てみたいんだけど、流石にそこまでは高望みはしない。

「じゃあ、これからここに魔力を打ち込んで強制発動させるよ」

「ちょっと待ちなよフェイト。この頃フェイトは無茶すぎだからここはあたしがやるよ」

「ん？お前、そんなに疲労が溜まるくらいやってんの？」

「えっ、そ、そんなことないよ！」

そういうフェイトを俺は観察する。（医療関係の本を沢山読み漁ったので見ただけでどこが悪いか、どこに疲労が溜まっているかわかる。でも注意して見ないと流石にわからない）

「おいおい、疲労とかかなり溜まってんじゃねえか。これでも食っとけ。これは食べると怪我や疲労が治る優れたものだ。魔力はしらんけど」

そういつて俺は仙豆をフェイトに渡すが、

「え？でも……そんなすごいのもらうわけには……」

と言って受け取らない。

しかしそんな疲れてる体でやられても困るんだよな。

「いや、疲れてたから封印失敗しました、じゃ洒落になんねえから」

なんかすつげえ悩んでんな。そう思ってたらアルフもフェイトを説得してくれたようですよと受け取ってくれた。

「じゃあ今回ののはあたしが発動させるよ」

「で、でも……それじゃ今度はアルフがたいへんだよ」

「あんたはまたあの白い子と戦うかもしれないんだ。

体力は残しておくことにこしたことはないだろ？それにあたしはあんたの使い魔だよ」

「……うん、ありがとうアルフ」

「よし、じゃいくよ」

そしてアルフはなんか魔力を街に打ち込んだ。（フェイトに解説してもらった）

そして少しした後、ジュエルシードが発動した。

「じゃ頑張ってこいよ。俺は遠くから見てるから」

「え？一緒に来ないの？」

「いや、もう片方のやつらが来たら面倒だから。つーか早くいきな。あいつら来るぞ？」

「あ、うんそうだね。じゃあまた」

そういつてフェイトたちは飛んで行った。

するとその後すぐに周りの空気の色が変わったから多分結界を発動させたんだろう。

タイミングから考えてなのはとクソネズミだな。

じゃ、俺もそろそろ観戦に行くか。

それにしても空から観戦したいんだけど、やっぱりベクトル操作かな。ARM使くとデバイスと勘違いされそうだし。

ドオオオオン！！！！

お、始まったな。はやく行かないと。

そして俺は風のベクトルを操作して飛び立った。

「うーん。魔法だったから期待してたんだがそこまで派手さがねえな。文章だったけどアクセラレータVS垣根の戦いの方が興奮した

んだが。

まあでもしょうがないかな。なのはの方は魔法を知ってから間もないもんな。

それにこっちの魔法はそこまで派手じゃないのかもしれないし」

俺はそう呟きながらも、二人の魔法（その基の魔力素も）を解析していく。

すると戦闘に変化があった。

それにしてもなのはは馬鹿なのか？戦闘の相手に説得なんか通じるわけなんかねえのに。

それにフェイトもフェイトだよ。そこで止まらずにとっと封印にいけないのに。

あ、やっぱりアルフに怒られてら。

すると二人は弾かれたようにジュエルシールドに向かって飛んで行った。

もう戦いも終わりかな。アンダータでも用意しておくか。

そう考えてジッパーを発動させてその中から一つ指輪を取り出した。

と、その時、

ドゴオオオオ！！「きゃああああ！！」「うつ……く……！！」

その爆音と悲鳴とともに、あたりを光が包み込んだ。

つついム。力大佐のマネをしたかったが、生憎今はシリアスだ。
それ以前にやっても誰も反応してくれなそうだが。

それよりも……

「……何やつちゃってんのあいつら……
この街は壊すなって言ったのに」

そして光にある程度目がなれると二人の格好はバリジャケットだったわけ？それを纏う前の格好に戻っていて、二人とも結構傷ついていた。

するとフェイトはデバイスも展開させずに突っ込んでいく。
たしかデバイスがないとちゃんと封印ができないんじゃないかなかったわけ？

それとも、ユーノが言ってたことは普通レベルで、フェイトはデバイスがなくてもそういうことが出来るレベルなのか？

でも無理して行って失敗でもされたらやばいよな。

しょうがない。解析もある程度終わったし代わりにやってやっかな。
ここでこいつが潰れたらあとで大変そうだしな。

そして俺は全速力でフェイトの元へ向かった。

結構な距離を離れていたが、音の壁を越えた俺にはそんな距離なんかあって無いようなもんだ。

そしてフェイトに接近して止める。

「こら待て馬鹿たれ」

「ダイスケ！？離して！このままじゃまた暴走しちゃうよ！-」

「傷だらけのうえにデバイスを持ってないお前に何が出来んだ。こついう時のためにお前らの使う魔力を解析してたんだよ。

おい、アルフ！フェイト連れて下がってけ！」

「わかったよ」

「大輔！君何してんのさ！」

「うつせえネズミ！てめえものは連れて下がってろ！」

そういつて四人（二人と二匹？）を下がらせようとしたが、ユーノはこつちに来そうだったのでテレキネシスでなのはと一緒に遠くにやり押さえつけた。

「さて、ショータイムだ」

そういつて俺は背中から未現物質ダークマターの純白の翼を六枚、三対出現させる。

そしてそれで魔力を放出を放出し続けているジュエルシードを包み込む。

すると後ろから悲鳴のような声が聞こえてきた。

「大輔君！魔法も使えないのに無茶だよ！」

「ダイスケ！あとはわたしがやるから早く逃げて！」

「ははは。何を言うかと思えば。お前らの常識でもの言ってんじやねえよ。」

俺の未現物質ダークマターに常識は通用しねえ」

すると翼の間から漏れていた光が次第に少なくなっていき、遂に光が消えた。

「う、うそだ……魔力も使っていないのに……」「すごい……」「よかった……」

みんな驚きながら三者三様の感想を言っている。
しかしアルフ、なぜお前だけそんなに睨む？

つーかもう長居は無用だな。

「よし。もう帰るぞ、フェイト、アルフ」

「ちょ、ちょっと待って大輔！そのジュエルシードを渡して！」

「あゝ？この世界に戸籍の存在しないクソネズミが。俺に意見するとは……覚悟できてんだろっな？」

そう言いながらテレキネシスでユーノを締め上げる。

「うっ！」

「それになのは」

「な、なに？」

「てめえ自分で街を守るって言うておきながらこの街を壊そうとしやがったな」

そういうと、なのはは俯く。

「別に今回は二人の衝突からのイレギュラーの様なもんだからとかく言うつもりはなかったんだが、お前は自分のデバイスが壊れたからって動かなかったろ」

言葉を続けるがなのはからは反応が返ってこない。

「力を持ったから何かを守りたいって思うのは別にいい。けどなその力を失ったとたんに諦めるのはまだまだ覚悟の足んねえクソガキの証拠だ。

本当に覚悟があつたならさっきのフェイトのように封印しようとしていたはずだ。

違うか？」

やはり返事を返せない。

「その程度の覚悟だつたならさっさと魔法をやめろ。才能があつてもそこに心が伴わなければただのゴミだ。

あと最後に言っておく。

俺はこの事態が早く終わるようにあいつらに協力する。その程度の覚悟しかないやつと一緒にいてもこの街を守れそうにないんでな」

そして俺はやつらに背を向けて帰ろうとしたら、

「……なんでまだいんの？今はお前らが逃げやすいように俺に注意を向けさせ、話を長くしてたんだが」

そう言うと、フェイトを抱えたアルフが、

「まだあんたからジュエルシードを貰ってないからだよ」

「そっぴやそうか。じゃあ一先ずこっから離れっか」

そっぴって俺たちはなのは達をおいて飛んでいった。
フェイトはアルフに抱えられていた。

そしてあるビルの上。

「ここが二人の住んでるところ？」

「そっだよ」

するとフェイトが何かを聞きたそっぴな目でこっちを見てくる。

「何か聞きたい事でも？」

「さっきのはどうやったの？ シュンからは魔力を感じなかったけど」

お、ちゃんと使い分けてくれてるな。

それにさっきのって未現物質のことだろ？
ダークマター

その説明にはなかなか時間がかるんだよな。

それにフェイトは今怪我してっから外で話すべきじゃないし、なによりここは肌寒い。

しょうがない。中にいれてもらうか。

「別にいいけど少し長くなるしまだ肌寒いし、お前も怪我してっから中で話そうぜ」

「う、うん」

なぜかフェイトは顔を赤らめながら答えた。

やっぱり寒かったのかな？こいつ薄着だし。

そして俺たちはフェイトたちの部屋に入った。

「さて、じゃあまずはあの翼のことでいいか？」

「うん」

「正直あれは出したくなかったんだよな……」

「どうしてだい？」

俺がため息を吐きながら答えるとアルフはニヤニヤしながら聞いてくる。

こいつなんとなく想像できてんな？

「だってさ、白い翼をはやすんだぞ？なんかハズクね？」

「そう？でもかつこよかったよ？」

「いや、まあ可愛い、または綺麗な女がやったら本当に天使に見えるんだろうが残念ながら俺は男だ。その男の俺からしたらすごく恥ずかしいんだよ。」

まあ、フェイトなら似合うと想うけど。

あとアルフ、爆笑してんじゃねえ」

アルフは横で腹を抱えて爆笑してやがる。ウゼエ……

それでフェイトよ、何故赤くなる？やっぱりまだ寒いのか？

「まああれの感想はおいといて。」

本題の能力の話なんだが、あれは未現物質ダークマターって言って暗黒物質ダークマターみたいに理論上存在する筈の物質じゃなくて本当にこの世に物質なんだ」

「そ、それってすごいのかい？」

やっと復帰したアルフが質問してくる。まあ普通は理解できないよな。

「この能力の本質はその物質を作り出すことじゃないんだ。

この物質はこの世界にある物理法則を捻じ曲げることなんだ。

まあ詳しいことはわからなくてもいいよ。俺もよくわかってないから。

まあなんかすごいことができるって覚えといていいよ」

まあ、それも本質ではなく、本当の本質は《こことは違う世界における無機》《神が住む天界の片鱗を振るう者》らしいんだけどな。

まあそんなこと言ってもわからんだろ。それに原作でも断言されてたわけじゃねえし。

「うん、わかった。

あ、あとついでに言っておくね。明日は母さんに途中経過を伝えるために一回戻るよ」

そっか、一回帰るのか。明日発動したらだるいな。

こいつのデバイスも壊れてるし。あ、そうだ。

「なあフェイトそれ俺も付いていつていい？」

「え？どうして？」

「それは俺の空間移動系の能力が次元世界間でも使えるか、ためし
てみたいんだよ」

後々なんかの役に立つかもしれないし、なにより管理局に捕まっても
余裕で逃げられるしな。

「そっか、わかった。いいよ。じゃあ明日の朝にこのビルの屋上で
ね」

「ん、わかった。じゃあそんな感じで。
じゃあおやすみ……あ」

「？どうしたの？」

「いや、結構大事なことを忘れてたわ」

そう言っただけはポケットからジュエルシードと仙豆を取り出し、フ
イトに渡す。

「はい。一応ダークマターで疑似的な封印はしてあるけど、デバイ
スが直ったらしっかり封印しなおしとけよ？」

あとこれはさっきのと同じやつだ。これ食って怪我治せ」

「うん。今日はありがとう。助かったよ」

ああ、笑顔が眩しい……

そういえばはやて以外の笑顔を見るのって随分久しぶりだな。いや、他人と係わること自体が久しぶりなのか。

こいつが魔導師じゃなければはやてといい友達になれそうなのになのははねえな。喧嘩（そんなレベルじゃない気がするが）してる相手と友達になろうとするなんて、どんな主人公属性かつ武闘派なんだよ。

正直そんなやつ、俺なら友達にはいらねえな。

「どうしたの？」

「ん？あ、わりいわりい。ちょっとボーっとしてたわ」

いかんいかん。思考が逸れ過ぎてたな。

「じゃあおやすみ。また明日な」

「うん、じゃあね」

「今日は助かったよ。あたしからも礼を言っよ。ありがとう」

「……………」

「ど、どうしたんだい二人とも」

「「アルフ（お前）が素直にお礼をいうなんて思わなかった（ぞ）」

「……！もういい！さっさと帰んな！！」

うん。完璧なシンクロだったな。つかフェイトにもそう思われてるなんて、ただけ謝んねんだこいつ。

「今度こそ、じゃあな」

「うん。また明日」

「フン！！」

そして俺は指輪を発動させた。

「デイメンションARMアンダータ。俺を八神家まで」

そして俺ははやてが待つ自宅へ転移した。

……しまったああ！？

あいつらの前で普通にARM使っちゃった！？
ヤッベー、また説明すんのか。ダリイなあ……

そして俺は明日、外出する予定の理由を考えながら玄関をくぐった。

P
S

はやてに言っていた時間より遅れたため、また霸王色の覇気のようなものを身に纏ったはやてに説教されて意識が飛びかけたのだった。

第十一話（後書き）

方舟

b y D ・ G r a y ・ m a n

ディイグレではいわずとした最高の移動用の道具

奏者の資格を与えることで他の人にも使えるようになる

中には広大な街が広がっているが殆どの家はまだゲートを繋げていないので勝手に入ると次元の狭間に落ちて即ゲームオーバー

因みに方舟の自由度はロード並みだからほぼ行きたいところにいける

162

未現物質
ダークマター

b y とある魔術の禁書目録

学園都市七人のl e v e l 5の中の第二位の垣根帝督の超能力

翼を出さなくても能力を使えるが全開で使うなら翼を出さなくてはならない（独自設定・原作では違いはわかりません）

今回はこんな所ですね

そして残る能力or道具は一つになりました

ではまた次回

第十二話

翌朝

「じゃあ、はやて。行ってくるね」

「うん、いつてらっしゃい……」

……なんか最近うちの扱いぞんざいになってきてへんか？はっ！も
しかして隼に好きな子が！？」

なんかはやてが最初は元氣のない返事だった。が次の瞬間には劇画チ
ツクな顔で驚愕している。

……さわらぬ神に祟りなしだな。

「昼はわかんないけど晩ご飯の時間までには絶対に帰ってくるよ」

「隼！？うちというものがあひながら他の子に手をだすなんて！！」

なんか触れてもいないのに祟りが飛んできたんだが……

つつか言ってることが理解出来ん。

「俺とはやては姉弟であつてそんな関係じゃない。」

それでこれからいくのは面倒事を早く終わらせるためで他に理由は

ない。（本当は方舟の試しだけだな）

あと今はその子と協力関係だけどこれが終わったら十中八九、二度と会うことは無いよ」

「そして数年後、運命的な再会をした二人は恋に落ちる。
テンプレやな！このリア充め！！」

ああ……なんかはやてがおかし「おかしくなっへん！」

思考まで読めるほどおかしくなったか。……見聞色の覇気じゃねえだろうな。

「まあなんとでも思ってくれ。
だけど一つだけ覚えておいてくれ。俺ははやてを一人ぼっちには絶対にさせないよ。拒否されても俺は傍に居続けるよ」

やべ、自分で言った言葉なのにクサすぎて鳥肌が立つちまった。
しかもこりゃ外したな。はやても真っ赤になって俯いて笑い堪えてるっぽいし。

「うん、約束やで／＼／」

「お、おう」

いやいやいや、これなんかフラグが立った匂いが。それも義姉のフ

ラグが。

ま、気のせいだろ。そうなの！そうなんだよそうなんです三段活用！……っは！？完全に今のはかのフラグマスター、上条当麻のセリフじゃないか！？

俺はあんな鈍感になりたくない！！

あ、でも俺がハーレムというか複数人から好意を向けられるなんてことはあるはずないか。

うん。もうこんなこと考えんのは止めよう。

そしてこの事はなかったことにしようそうしよう。

「じゃ、あらためて、いってきます」

「いってらっしゃい／＼／」

まだはやての顔が赤い。いや気にしたらいかん。

そして俺は人気のないところまで行き、『アンダータ』を発動させてフェイト達のマンションの屋上に移動した。

屋上に着くとすでにフェイトとアルフが待っていた。
そしてフェイトの手には（多分）ケーキの箱が握られていた。

……あれ？もしかしてこいつら気付いてない？

「おはよう。フェイト、アルフ」

「うわ！？なんだあんたか、ビックリさせんじゃないよ」

「いや、お前って元が狼なら気配読むのって得意じゃないの？」

「あんたの気配は読みにくいんだよー！」

？なんか特別なことしてる覚えはないんだけど……

ああ！そういえばいろんな力をセーブさせてっからそのせいかな。

「おはよう、シュン。ところで急に現れた感じだけどそれが昨日言
ってた試したいものなの？」

「いや、これともう一つある。

どっちもフェイトたちにわかりやすく言うとロストログアだよ。ま
あ移動専用だけだね」

めんどいからその程度でいいか。

つつか『方舟』ってあの世界でも言い方を変えれば完全にロストロギアだよな。

「そうなんだ。じゃあそろそろ行こうか」

なんかフェイトのやつ、そわそわしてんな。
早く親に会いたいのかな？このマザコンめ。

「次元転移。次元座標、876C 4419 3312 D699
3583 A1460 779 F3125」

そう考えているとフェイトは詠唱をしていく。

そしてフェイトの言葉と同時に黄色の魔法陣が展開される。

「開け、誘いの扉。時の庭園テストロッサの主の元へ」

そして俺たちを光が包み込んだ。

「着いたよ、シュン。ここが私たちの家、時の庭園だよ」

フェイトにそう言われて周りを見回すと、広い庭、大きな城（？）みたいな建物が建っていた。つうか周りの空間の色合いとも相まってなんか禍々しい雰囲気が出ている。

……空氣的にここってラスボスの城じゃね？
いや、気にすんのは止めよう。

「あ、そうだ。これ一応お前の親に渡しとけ。流石に手ぶらでよそ様の家にはいけねえから土産だ」

そういつて『ジッパー』から土産（酒類。はやてが二十歳になった時に一緒に飲もうと色々な種類の酒がある。一種類複数個あるから他の人にあげても大丈夫）を取り出し、アルフに渡した。

「なんであたしに渡すんだい」

「いや、それ結構重いからお前に渡したんだが」

「お前が直接渡せばいいだろ」

ああ、そういうことね。でも俺にはやることあるんだよ。

「流石に俺は一家団欒のところに邪魔するつもりはないよ。ここで色々試しながら待ってるから、ゆっくりしていいよ。あ、でも俺のやつで次元間の移動が出来たら先に帰ってると思うよ」

「うん、わかった。じゃあ行ってくるね」

「おう、また後でな」

そう言っただけでフェイトは家（つつかやっぱりラスボスの城だろ）に入ってしまった。

そして俺は誰もいなくなったところで頭の中で唄を唱える。すると、目の前に、『方舟』のゲートがちゃんと出現した。

まあ、言っちゃなんだがこっちは出来ると思ってた。

問題は次の次だ。

「『アンダータ』、俺を八神家へ」

……やっぱりこっちは無理か。あの世界の世界移動の方法は『門番ピエロ』だけだったからな。

つうかこのフェイト似の女の子の幽霊ってなんだ？

話しかけることもせずにくっつきをボーッと見てるなんて。ていうか、この子体だけじゃなくて目も死んでんな。

どうしたんだろ？

そういえばフェイトは姉妹がいるなんて言っただけだったな。

亡くなってたから言わなかったのかな？

念話で確認してみつか。

アルフなら特に気にせずに教えてくれるよな。

『もしもし、アルフ聞こえる？』

『あんたか、一体どうしたんだい？』

『特に大したことじゃないんだけど、フェイトって兄弟とか姉妹とかいた？お土産でそのこと考えてなかったから、大人用のやつだけなんだよね』

『ああ、そのことかい。あの子には兄弟も姉妹もないよ。あの子の親もそういうことは何にも言っただけだからね』

『ん、わかった。あ、そうだった。次元間の移動のことなんだけど成功だったから先に帰ってるから、フェイトにも伝えといてね』

『わかったよ』

『じゃ』

うーん、つうことはこの子って一体なんなんだ？

あそこまでそっくりだと双子だと思ったんだが。

もしくは……

……いや、まさかな。そんなことはあるわけねえか。

それにしてもこの目からずっと、死んでから誰とも話してなかったんだろぅな。

まあ幽霊には次元間の移動は出来ないっばいしあの二人にも霊視とかそういうことが出来そうになかったから仕方がないか。

つうかがキがそんな目をすんなよ。その歳でその目とか、昔のはやてを思い出してほっとけねえじゃねえかよ。

「おい、その幽霊少女。俺の声が聞こえるか？」

「え……？あなた、わたしが見えるの……？」

その少女は俺を縫る様な目で見てくる。

今までは誰も反応してくれなかったからだろうか、少し嬉しそうにも見える。

「おう、ちゃんとお前と会話出来んぞ？ついでに言つと触れるよ？」

「ほんと?」

「ほんとだよ。あと、出来ればここじゃなくて他の場所で話したいんだけどいい?」

俺がそう言つと少女は俯いてしまった。

「ごめんなさい。わたしここから出られないの」

「?どうしてだい?誰かにここから出ないように言われてるの?」

「ううん、違うの。ここから出ようとフェイトに着いて行こうとしたことは何回もあったんだけど、どうしても出られなかったの」

ううん。これはどういうことだ?やっぱりこの世界の魔法は幽霊は対象に出来ないのかな?

それともこいつ自体がここの地縛霊になつてんのか?いや、外に行こうとしたことから考えるにその可能性はないか。

じゃあなんでだ?

……まあいいか。そんなのどうせ『方舟』には関係ねえだろ。

「じゃあ試しにこれに入つてみて。ダメだったらしばらく俺もここにいろし、ちよくちよく会いに来るよ」

「うん、じゃあ入ってみるね」

そして、少女は『方舟』のゲートに向かって歩いていき……消えた。

「やっぱり成功か。流石は『方舟』だな。じゃ俺も入るかな」

そう呟きながら俺も『方舟』に入り、その後ゲートを消した。

そして『方舟』の中で軽く説明したり、この少女の反応が凄まじかったりしたが割愛。

そしてしばらく話していたが、そろそろ俺もこの少女に聞きたいことがあるので話を聞いてもらわなければ。

「落ち着いた？」

「うん！お兄ちゃんありがとう！わたしずっと久しぶりにお外に出られてすっごくうれしい！！」

そのテンションは落ち着いたって言わねえよ。

ま、しょうがないか。長い間幽霊の状態でいたとしても何かを経験してなかったなら精神年齢は成長しないだろうから、見た目通りなのかもな。

「じゃあ、あらためて自己紹介をしようか。俺の名前は八神隼、8歳」

「わたしの名前はアリシア・テストロッサ！よろしくね、お兄ちゃん！
わたしは5歳の時にこんな風になっちゃってから歳は今をよくわかんない」

5歳か……たしか俺たちの5歳の時って母さんたちが亡くなった時か。

そう考えると俺がいなかった場合のはやてってこんな風に暗くなっちゃってたのかな？

そう考えるとすごく心苦しいな。

それにまだ問題は残ってるんだよな。

「アリシア、君はフェイトのお姉さんでいいの？」

「うん、そうだよ。でもあの子はわたしのことは知らないんだ……」

しまった、これは地雷だったか。やっぱり聞くべきじゃなかったか。

「それにママはあの子のことをわたしのクローン、わたしの出来損ないって言ってたの」

マジかぁ……最悪の予想が当たりやがったぞ。

今の口振りからするとこいつらの親はある程度以上の科学者で、タダのクローンを作ったってわけじゃないんだな。

もしかして禁書インデックスで言う学習装置テストメントでも使って記憶でも埋め込んだけど、人格は再現されなかったってことか？

つつことはこいつらの親はフェイトに対して何の感情も抱いてないか、ただの道具としか見てないのかもな。

クソッ！これじゃあいつが不憫すぎんぞ！

しかもこれはいくら俺が動こうがあいつらの親が心変わりしなけりやなんも意味無えじゃねえか。

……そういえばたしかジュエルシードって願いを叶える石だっけってたから、それを何かに使ってアリシアを蘇らせるために使うのか。

つつかこの世界の魔法って空気中の魔力素とかいうのを使って何かを起こしてるだけの、ある意味ではタダの科学なんだから、物理法則を無視するような死者蘇生なんか出来ねえだろうに。

しょうがねえ。俺は成り行きを見てるだけにしとくか。

それにアリシアを見てやっとなフェイトを手伝おうと思った理由がわ

かった。

フェイトはアリシアほどじゃないがあ頃のはやての目に似てるんだよな。

なんで俺の周りにはこんな目をするような奴しかいねえんだよ。

これからの俺のすることはとりあえず、アリシアを成仏させる方法を考えなければいけないな。

流石にずっとこのままってのも不味いしな。

体があつたらまだどうにかなったかもしれないんだが。

はあ……ジュエルシード集めからこんな大事になるとはな。

はやてに頼んでしばらく家を空けさせてもらうか。

そつと決まればさつそく行動しないとな。

「アリシア、ちょっと俺は外に出てくるからここで留守番しててくれ」

「?どうして?」

「アリシアを一人にさせとくのもなんか嫌だから俺もここに泊まるために、ちよつと家族のところに行つてくるよ」

「わたしも一緒に行く!」

「ダメ。俺の家族は俺みたいにアリシアと話せるわけじゃないか

「我慢して」

「む。わかった。じゃあ待ってるね」

「じゃ、行ってくるな」

そして俺は『方舟』から出て家に向かった。

……どう説明しよう？

第十二話（後書き）

一応書いときますが、はやての覇気はギャグパートのみですんで

第十三話

あの後、なんとかはやてを説得することが出来、今はしばらく『方舟』の中で暮らすための食糧を買いにきている。（『方舟』の中には既に日用品は五セットぐらいはある。ちなみに中で自家発電しているため家電製品も普通に使える。一時期別荘化計画も立てていた）

そして大体を買い揃えて『方舟』に入るため、人気のないところまで移動して、

「……いや、ねえよ……」

目の前でジュエルシードが発動してしまった。

そして二組とも近づいてくる気配がする。

これは前回の二の舞にならないためにも俺もここにいた方がいいかな。

それにしても前回なのはにはあんなに言ってやったのにまだ参加するか。メンドくさいやつめ。

そして俺は『ジッパー』に荷物を仕舞い、目の前のジュエルシードの暴走体に向き直る。

どうやら今回のジュエルシードの暴走体は木の化け物のようだ。

つつかなんかキメエなこいつ。リアル人面樹じゃねえか。

そんな風に考えていると、二組がやってきた。

なのはがなんか言ってきたが完全に無視だ。

自分から首を突っ込んでくるようなガキは嫌いなんだよ。

それよりもフェイトだ。あいつ、母親になんかされてんじゃねえか？
つつか母親との仲良く過ごしてた日常が記憶に残ってるだろうから、
虐待されてようが逃げ出そうなんて思わないんだろうな。

俺はそう考えながらフェイトを観察するが、やはり何かおかしい。
疲労というか、怪我というか……殴られた？いや鞭で体中打たれた
か。少し関節の動きも固いな。

こいつ大丈夫かよ……

アルフは止めないのか、止められないのか。
まあ、予想だと止められないんだよな。アルフも止められなくて悔
しいんだよな、フェイトが大好きだって言ってたし。

そうして俺が観察していると二人は暴走体に向かって魔法を放つが暴
走体はバリアを使って攻撃を防いでいる。

これ以上フェイトにやらせんのはあいつの体に障るかもしれんな。
後は俺がやるか。

まだこの世界の魔法を全て解析したわけじゃないからわからないけ
ど、やらないよりマシだろ。

そして俺は『ジッパー』を発動させ、そこから指輪を取り出し、魔力を込め発動させる。

「出てこい。『鬼火属フォレ』」

そして指輪は小人になった。

「ボス、呼んだ？」

「おう。今回はあいつを燃やして欲しいんだけどいけるか？」

「うん！木ならなんでも燃やすよ！」

こいつ周りの木まで燃やさないよな？一応釘はさしとくかな。

「燃やしているのはあの動いてる気持ち悪い木だけだから、他は燃やすんじゃないぞ」

「OK、ボス！」

「じゃあちよつと待ってる」

『フェイト、アルフ。今からそのキモイの消すからちよつと離れとけ』

『え、でも』

『封印処理だけは頼むから、離れてろ』

『う、うん……わかった』

やっと離れたな。

なのはは元々離れたところから砲撃をしようとしてたっばいから言わなくても平気だな。

「よし、じゃあいけ」

「あいよー！」

そしてフォレは木に向かっていき、大火力でバリアごと一気に燃やしきった。

「お疲れ、フォレ」

そういつてフォレを指輪に戻し、『ジッパー』に仕舞った。

『じゃあフェイト、封印よろしく』

『う、うん』

そしてフェイトはなのはとユーノが啞然としてるうちに、いち早く復帰してジュエルシードを封印して、回収しようとしたが、そこではなのはが気付いた。

気付かなくてよかったのに。

「ま、待つて!!」

私はフェイトちゃん、あなたとお話したいの。

私がただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら、お話、聞いてくれる？」

そう言われたフェイトは俺の方を見てくる。

いや、フェイトよ。俺の方見てもどうにもなんねえぞ？

つつかなのは、そう言ったのって俺じゃね？

まあいいか。フェイト自身、なのはのことは嫌ってないみたいだから、背中を押すぐらいしてやるか。

「フェイトの好きにしたらいいよ。

でも前回みたいに暴走したら困るから俺はジュエルシードが暴走しないように見てるよ」

本当なら無理やりにも止めて治療してやりたいが、流石にこの空気をぶち壊してでも止める程の重傷じゃないから我慢するか。

すると二人は互いに睨み合いになり、正面からぶつかり合うようにいく。

しかし二人が動き出した瞬間に二人の間の空間が光り、そして……

「ストップだ！！ここでの戦闘行動は危険すぎる！

時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ。

詳しい事情を聞かせてもらおうか」

と言いながら突然現れて二人を止めた。

……なんだこの偉そうなガキは。

つつか空気読めよ。

いや、今こいつ、管理局って言ったからわざとこのタイミングを狙ったのか？

それより、ここって管理外世界だからこいつらにはなんも権限なんかないんじゃないのか？

「まずは二人とも武器を引くんだ。

このまま戦闘行為を続けるなら……」

そう言いながら三人が空中から降りてくる。

一応俺も近くへ行くかな。

そして地面に降りた瞬間、オレンジ色の魔力弾がクロノを襲う。
しかし、クロノは容易くそれを防ぐ。

はあ……アルフよ、お前は管理局に敵対すんだな。

まあ俺は自分の能力がバレない程度にフェイトのフォローをしてや
つか。

「フェイト、撤退するよ。離れて！」

そしてアルフが魔力弾を撃ち込むのに合わせて、フェイトはジュエ
ルシードを回収するために飛び上がった。

……あゝ、回収忘れとった。

アルフの撃ち込んだ魔力弾は威嚇だったらしく、当たらず、数も少
なかったが砂埃などで煙幕を作った。

そしてその隙にフェイトがジュエルシードを取ろうとするが、

ヤベェ！あのクソツタレ、攻撃しようとしてやがる！

そして俺はなりふり構わず『ダークマター未現物質』を発動させ、さらにベクトル操作も併用して、音を超えた。

ドドドド!!

クロノの放った魔力弾がに当たり、辺りに立ち込めた煙で姿が隠れた。

「ダ、ダイスケ!!?」

「心配すんな怪我なんかしてねえよ」

そう言いながら大気のベクトルを操り、煙を晴らす。

そしてこの瞬間、頭の中のスイッチが切り替わる感じがした。

「我慢ならねエ。女に手エ出すたア、男のやることじゃねエんだよオ。」

フェイトオ、俺は残るからお前はアルフ連れてさっさと帰ってろオ」

「でも……」

「全力が出せなくなるから帰れって言ってんだア!アルフウ!」

「わかったよ。行くよフェイト」

そしてフェイトはこっちをしばらく気にしていたがやっとここから離脱していった。

「君は何をしているのかわかっているのか!!」

ガキが吠えているが、知ったこっちゃねえ。

「テメエこそイキナリ出てきて何様のつもりだア?

それによオ、この国には時空管理局なんて組織なんざ存在しねんだよオ。

それなのにお前は俺に指図すんのかア?

もしそうなら覚悟は出来てんだろオナア。 あア!？」

「魔法を使う者が犯罪を犯さないようにさせるのが管理局だ!」

「じゃア尚更カンケエねエナア。 なにせ俺の力はテメエらみてエな貧弱な魔法とはカンケエねエもんだからナア。

まアつつことでエ、テメエには不法入国や殺人未遂、その他諸々つけて現行犯逮捕させてもらおオカア?」

「何をふざけたことを言っている!!」

「アゝアゝ?」

オレア当たり前の事しか言っただろオ。

この世界のこの国の法律に基づいたナア。

それとも何かア? テメエら管理局とやらはア、侵略行為のようにそ

の国の法律を無視すんのかア？

もしそんなことするならア……テメエらの世界と全面戦争だぞオ？
この世界の人間、ナメんじゃねエぞ」

「貴様……！！」

そういいながら、デバイスを俺に向け攻撃しようとしている。

口で負けたら実力行使か……全く、底が知れるぜ。

そして俺が迎撃態勢を整える瞬間、空間にモニターが現れた。

「待ちなさい、クロノ執務官」

「な！？母さ、艦長！？」

「武器をしまいなさいなさい、クロノ執務官。

ここで攻撃でもして見なさい。その子の言つとおりあなたの行動は
侵略行為となんら変わらないわよ」

「クツ……！！」

なんだよ、やんねえのか。流石にこっちから攻撃をしかけたら俺の
立場が悪くなるから我慢するかな。

そしてまたスイッチが切り替わるような感じがした。

「用がねえならもう帰んぞ」

「待ってください。あなたにはお聞きしたいことがあるので、こちらに来てくれないでしょうか」

どうすっかな？

あいつらの文明って電気って使ってるのかな？電気を使わずに魔力で全てやってたら行っても情報を取れそうにないんだよな。

まあ行くだけ行ってやっか。

「別にいいけど、話し合いの場にこいつは連れてくんな。こいつがいたらまともな話し合いが出来そうにない」

「なんだと!!」

「お前は俺らの世界の常識をしらねえから話の腰を折られそうなんだよ。」

それに引き替え、艦長だっけか？そんなくらい偉けりや常識の違う連中と接したこともあるだろうからまだ話し合いが出来そうだからこの話を受けた。

もしこの提案を受けないなら俺はそっちに行かねえ」

「……わかりました。そのかわり武装の解除をお願いします」

「ああそれ無理」

「なんだと!!」

「いちいちうるせえな、お前は。」

さっきも言ったように俺の力はお前らのとは違うんだからお前らの感覚で話すな。

俺の力の源は自分の体。細かく言えば自分の脳だ。だから俺に武装解除しろってのは死ねって言うてんのと同義なんだよ。

だからお前らも話し合いの場には武装してきてもいいぞ。俺が信用できなければの話だけだな」

まあ俺は信用されてようがなかるうが、中が電気を使ってたらハツキングさせてもらうがな。

こいつらがその管理局の中でどれ程の地位にいるのか、そして管理局はどんな組織になってんのか、さらにこいつらの世界の法律がどうなってるのかは知っとかなきゃいけないからな。

それによって今後の対応が少しは変わってくつからな。

「わかりました。ではあなたを次元航行艦船、アースラへ招待します」

「君たち二人もいいか？」

「あ、はい!」「はい」

ああ、そっぴやこいつらいたな。すっかり空気で気付かなかった。

そして俺たち三人と一匹はその場から転移した。

……あゝ、アリシアのこと忘れてた。
後で謝るかな。

第十三話（後書き）

話の途中に出てきたスイッチが切り替わるような感じというのは、只ブチギレて荒んでた頃のアクセラレータみたいな思考（残虐かつ、相手がどんな奴でも容赦はしない）に切り替わったってことです

それ以外に影響する事は特にはないです

さて、次回遂に主人公は管理局について、人の口からではなくデータから知ることになります

果たしてこれからどう行動するのか、お楽しみに

第十四話（前書き）

お久しぶりです

意外に大学生って大変なんですね
あまり書く時間ありませんでした

第十四話

その後、俺たちは次元航行艦——俺の認識ではよくあるアニメな
どの宇宙船だが——に着き、クロノに先導されるまま艦の中を歩
いている。

その際、ユーノが人間だったことが発覚したのはが驚き過ぎてパニ
ックになっていたが割愛。

俺はそれを聞いて納得した。なぜなら俺の体からは常に微弱な電磁
波を出している（on、off 出来るが、最近は精密機械の近くに
いないので常にon）ため、動物には近づかれないのに、ユーノは
一番最初あった時から今までずっとなにも言っていないのを不思議
に思っていたからだ。

俺に近づける動物は今のところ家の近くでたまに見かける猫だけだ。
あ、そういえばアルフも近づけるし何も言っていなかったな。アル
フはそういうのに気づいたら遠慮せずに言いそうなのになんか言っ
てこないからあいつ、つか使い魔は平気なのか？それともフェイトが電
気を使うから慣れたのかな？
まあいつか。

しばらく歩いているとクロノがいきなり立ち止まった。どうやら会
談場所の部屋の前に着いたようだ。

「クロノ、この話し合いは俺と中の奴らだけでやるから、なのは達

はどっかにつれてつとけ。

俺がする話にやこいつらは関係ねえし、まず第一に俺はこいつらの仲間じゃないから俺のことはこいつらに話す気はないからな」

すると、クロノは少し黙った。

おそらく艦長と念話でもしてんのかな。

「わかった。

君たち二人には悪いんだが、この後に君たちからも話を聞きたいと艦長が言っているので少し待っててもらってもいいかな」

「あ、はい！大丈夫です！」

「僕もです」

「じゃあ君がもうここに着いていることは艦長に伝えたから入っていいぞ。

君たち二人には他の場所で待っててもらうことになるから、僕がそこまで案内するよ」

そういつてクロノと二人はどこかにいった。

クロノは最後まで俺に敵意を向けていた。

まったく、自分の常識でしかものを考えられないやつってのはいつも面倒だな。（まあ俺もだが）

ここは管理外世界なんだからお前はデカイツラ出来る場所じゃないってことはわからんのか？

そんなことより、今回はこいつらの情報を取りに来たつてのがメイ
ンだったな。

相手は艦長だから気を引き締めてかからないとな。

そして俺が扉の前に立つと、自動で扉が開いたので中に入った。

その部屋は執務用の机と応接用の机のある、十中八九艦長室だろう。

「いらつしゃい。私はこの艦の艦長、リンディ・ハラウンです」

そう挨拶してきたのは、先刻のモニターに映っていた女性だった。
その隣にはもう一人、こつちの世界で言うと高校生くらいの、明ら
かに非戦闘員（纏う空気から）の女の人がいた。

このメンツからするに、戦闘はしないか、艦長自身が戦えるのだろ
う。（艦長の空気は読めないが、その時点で戦えると思っていて問
題ないだろう）

「俺は一先ず現地に住んでる少年Aで。

今はまだそちらの組織がなんなのかわからないのね。

自己紹介がしてほしいのなら、そちらの組織がどのようなものか、
機密はいいので教えてもらいたい」

「わかりました。エイミィ」

「はい。」

え〜と、私たちは時空時空管理局は……」

「ストップ」

「「え？」」

「俺はその組織に所属する人から、その組織について聞くことはいやなんだ。どうしても自分たちがいいように説明してしまうからなでもここには他に聞ける人がいないから、出来ればデータか何かで見せてもらいたいんだが」

言ってることは本当なんだが、今回は端末が欲しいから言ったつてのが大きい。なにせこっちの世界の端末じゃ接続すら出来ない虞おそれがあるからな。

俺がそう言い切ると、エイミイと呼ばれた女の子も困った顔をして艦長の顔を見ている。

そしてその艦長は目を閉じ、暫し考えている。

そしてしばらくして、

「いいでしょう。この艦にある端末から機密情報にアクセスするためにはロックがかかっているので問題ないです。」

エイミイ、まずは管理局のページを出して見せてあげなさい」

「了解しました」

そしてエイミィは端末を操作し、渡してくれた。

「すみません、我儘言つて」

「いいえ、大丈夫ですよ」

そう言つて、艦長は俺に微笑みかけてくる。

……なんか100%信用出来る様な笑みじゃねえな、このメスダヌキめ。

「これはちょっと長いので、読むのに時間がかかっても？」

「大丈夫ですよ」

艦長は許可してくれた。

どうやらこいつは俺が強がっていると思つてんな。

まあこの艦のトップだからこの世界のことは知つてて、この世界の子供は俺以外はこんな風じゃねえから油断してんだろ。

今回はその油断を利用させてもらうがな。

それにしても一部に電気が使用されててよかったぜ。

そして俺はこの管理局を調べていく。

エイミィから渡された画面は明らかに内容がぼかされてて、この世

界の普通の大人じゃ疑問に思うほど穴だらけだった。

これは子供か、もしくは魔法を手に入れて浮かれてるやつに見せるためのものかな。

もしくはこの世界が舐められてるかだが、今回はどうでもいい。

この文が上から目線で書かれててなんかムカついたがそれもおいておこう。

次に電気回線を通してハッキングをして、時空管理局がどんな組織かっていうのを任務やその他諸々から推測していく。

どうやらこの時空管理局というのは表面上は真面目な組織の様だが、反面腐った上層部のやつらを裁きづらい組織体制の様で、気に食わない。

まあ現場の奴ら、というか目の前のこいつらはマトモそうだから今回はいいか。

最後にこいつとクロノ、ついでにエイミィの過去も調べとくか。

まずはリンディから調べるか。

……うん。特に問題はなさそうだな。まあ闇の書事件とやらで旦那を失ったのは可哀想だがあんまり気にしてもしょうがないか。次はクロノだ。

……ん？師匠である使い魔の主がギル・グレアムだと？

あのジジイと同名同名かよ。どんなツラしてんだ？

……はあ！？同じツラじゃねえかよ！？

あのヤロウが怪しいってのは最初っからわかっていたがまさかこんなところで出てくるとは……

それにこいつ、かなり偉いやツじゃねえか。

それにしても俺らの父親は普通だった筈だ。つつか実際に匣の実験

でストーキングとかさせたから間違いない。

だとしたらあのジジイが俺らに近づいた理由はなんだ？

あの頃は俺は能力なんか碌に使ってないし、道具だってこっちの世界の法則のものじゃないものばかりだからただのガラクタにしか見えねえハズだ。

だからあいつは俺目当てじゃないだろう。つうか俺が目当てならもう手を出してるハズだ。

両親の事故だってあいつが関わってるところなんか無いから責任を感じて援助を名乗り出る必要なんか無い。

こいつの人生に係わるようなことで俺たちに関係のある事件やその他があつたのか？

……こいつにも闇の書事件のことが書かれてやがる。

この事件にはプロテクトが掛かってんな。だけとお生憎様、俺のスパコン並みの演算速度をなめんな。

ついでにいえばもう地球上には俺がハッキング出来ない場所なんか無いほどのレベルまで鍛えたかな。

…… よしいけた。予想より科学は発達してねえな。科学兵器、いや向こうだと質量兵器か、それを禁止した弊害かな？

それよりも闇の書事件の概要だ。

…… 無限転生機能がある呪われた魔道書か。

これのせいで人生を狂わされた人が多いのか。そしてグレアムやリンディもその一部と。

そんで画像が……！！！？？

そうか…… そついうことかよ……！！

「どう？ わからないところとかあつたかしら？」

「いや、もう大丈夫だ。ちょっと5分ぐらい待ってる」

「え…？ちょ、ちよつと！」

エイミィに端末を投げ渡す。もちろん闇の書の辺りは足跡を消しておいた。

艦長が何か言っていたが知ったことか。あのクソ猫どもめとっ捕まえてやる。今日はいたのは確認済みだからな。

そして俺は方舟を使って自宅の玄関前に転移し猫を探すと、すぐに電磁波レーダーに反応があったので近くによると驚いて逃げようとする。

だけど甘い。俺から逃げるならもっと早く逃げるべきだったな。

「逃げんなよクソ猫」

そう言いながらテレキネシスで思いつきり締め上げる。

最初のうちはジタバタ暴れていたが、少しすると大人しくなった。

そして俺はこの猫を連れて艦に戻った。

「待たせたな」

「あなた、どこに……いえ、どうやって!？」

「うるせえ。俺のことならこいつに聞け。

こいつはお前らと面識があんだろ」

そう言って持っていた猫をリンディに投げ渡す。

するとリンディの顔が驚愕に染まる。

「アリアさん!？」

あなたいったい何をしたの!？」

「悪いとは思ったがお前らが信用できるか、ハッキングさせてもらって過去をみせてもらった。

そしたら驚いたぜ。

よく自宅近くにいた猫がまさか使い魔でクロノッてのの師匠だとは思わなかったぞ。

頻度やらから考えるにこいつらは俺らの家の何かを監視してたんだろ。

なにもしていないのに監視されてるなんて気に入らねえからちよつと連れてきた。

事情は知らんからそいつから聞いとけ。

まだそいつが起きるまで時間がかかるだろうからジュエルシードのことについて話そうか」

「待つてください。あなたはこの端末の操作方法を知らないにも関わらず、どうやってハッキングしたんですか」

口調には怒りが込められているがこっちの方がムカついてんだよ。大人しく話聞いてるってのに。

「俺はあの世界では科学者の頂点にいる人間だ。そしてその頭脳に電気を操る能力を合わせたら電気的なもので俺に操作出来ないものは存在しない」

チートパワーナメんなクソツタレが。

リンディが批難してくるが知ったことか。

「俺はここでは何も行動を制限された覚えは無い。

それになんだ？お前らはいきなり攻撃してきた奴らが無条件に信用できるほど頭のネジが緩んでんのか？

それならとつとこんな組織をやめてもつと普通のところで働いてる。

こんな軍みtainな組織でそんなことをしたらただ殺されるだけだぞ。あと二度目だが……あんまこの世界を見下すな。ぶっ殺すぞ」

俺がそう言い切るとリンディは動揺を隠せず、エイミィに至っては顔を蒼くし震えている。

「この話は後だ。まずはジュエルシードについてなにか聞きたいことはあるか」

「その前に、あなたは魔導師ですか？」

「リンカーコアとやらはあるらしい。今出来んのは連絡用に念話を教えてもらったただけだ」

「そうですか。ではきっかけを教えてくださいてもよろしいでしょうか」

「やだ。どうせユーノから聞くんだろっから同じことだろ」

「……わかりました。ではあの黒衣の魔導師のことを聞いてもよろしいでしょうか」

「あいつとはジュエルシードの暴走体と戦ってて、ユーノたちと念話が出来ない時にちょうどあいつらが現れて封印してもらったのが最初だ。

それ以後は街、つつか家族に被害が出そうな時は俺も行って封印に協力したただけだ。

個人情報金髪がフェイト、狼の使い魔がアルフって名前ってことしか知らん」

「ではともに行動する理由を教えてくださいてもよろしいですか？」

「利害の一致」

「え？……そ、それだけですか？」

「当たり前だろ？あんなのこの世界にはいらないうえに危険なモンだから、回収してくれんならあげるに決まってるんだろ」

「あの子が悪用する可能性を考えなかったのですか……？」

「目でわかるわ。ありや私利私欲に走った人間の目じゃなかった。俺はその手の人間の目をよく見てきたからわかる。

それに年端もいかない女の子だ。隠し事が上手いわけねえだろ」

「そうですか……」

ではあなたがジュエルシードの封印を彼女らの側で手伝う理由は？」

「フェイトたちの方が強いからに決まってるんだろ。

強い方についてとっとと封印した方が街に被害が出ないだろ。

俺は自分の感情より効率を重視する人間なんぞな」

正直、感情でもフェイト側に着いたと思うけどな。

「では最後に、なぜあなたは危ないとわかっていてジュエルシードの封印を手伝っているんですか？」

「あいつらが失敗して街に被害が出ないようにするため。それ以上でも以下でもない。

ついでにいうと俺にとってはあの程度はそこまで危険じゃない。

だけど家族は俺と違って普通の人間だから、そこまで被害の範囲が広がる前に協力して封印してるってただけだ」

「事情はわかりました。」

これより、ロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「ちげえよ」

「え？」

俺のその返事にエイミィは呆然と、リンディは驚いたような顔をした。

「お前らが持つものは権利じゃない、責任だ。」

ここがお前らで言う、管理世界だったならそれでいいが、ここは管理外世界だ。

自分らでそう決めてんなら言い方やわかる筈だろ。

そこを勘違いしてんじゃねえぞ」

「……もうしわけありません」

「じゃあ、これでジュエルシード関連の話は終わりだ。」

俺の能力については何も言つつもりがないが、その他に聞きたい事でもあるか？」

「では、アリアさんたちがあなたやその家族を監視することの心当たりはありますか？」

「知らん。」

俺はユーノと会うまでは魔法の存在を知らなかったから心当たりはない」

「そうですか、では彼女らに直接聞くことにします」

「ああ、そうしろ」

やましいことがないか、カマをかけるつもりで言っただろうが、残念ながらその程度ではひっかかることはねえんだよ。そのような腹芸はとつくの昔に習得しとるわ。

「じゃあ、俺はもう帰るぞ。

お前らと話し合うことなんかもうないからな。最後に一つ、俺の家には絶対に来るな。もし来たらこの艦、沈めるからな」

「待ってください。今転送ポートへ案内するための人を呼びますので」

「ああ、そんなもんいらん。自分で帰れる」

そして俺は後ろで何か言っているのを、またも無視して帰る……フリをした。

それも、霧属性の匣ボックスの幻覚を使ったので、むここの機器でも感知は絶対に出来ない。

そして俺はその後、この艦にいろいろと仕掛けを施してから、アリ

シアの待っている方舟に帰った。

これから、はやてのことをどうにかしなきゃな。

途中で投げ出すのも嫌だから、結末はどうあれアリシアのこと最後まで面倒見なけりゃな。

これからはやることが山積みだな。

だけど、絶対にはやてだけは、幸せにしてみせる。

第十四話（後書き）

今回のリンディの部屋の件ですが、いつもアニメみたいな部屋じゃないだろうし、リラックスしてもらったためにあんな風にしたんだという独自解釈の下、主人公とは普通の部屋で会談してもらいました

そして今回ので分かるとおり、この小説は管理局アンチになります
一応、タグには追加します

因みに最後のセリフは、エ。ア。破の最後の彼のセリフがモチーフ
になっています

作者は。ヴァが大好きですから
早くQやらないかな……

第十五話（前書き）

長く間が空いてしまつてすみませんでした

なかなか筆が進みませんでした

まあ所詮は言い訳です

ちなみに今日が夏休み最後の日だぜ！！

つっても用事があつて全然休みじゃないんだけどな！！

長くなりましたが本編をどうぞ） ・ ・ （ つ

第十五話

あの後、アリシアと話しながら、ご飯を食べて（アリシアは霊体の状態でご飯は不要なので俺だけ）から、『方舟』の中で遊んだ。

アリシアは誰かと遊ぶのが嬉しいらしく、ずっとはしゃぎ回っていた。

その姿に、はやても元気だったら……と思い、つい泣きそうになってしまい、アリシアに心配させてしまった。
もちろん誤魔化した、どうも信用していないようだった。

どうやらポーカーフェイスが完璧だと思っていたら、はやてのことに關しては別らしい。

俺はシスコンじゃないはずなんだがな……

そして動き回るのがかなり久しぶりだったのか、アリシアは少ししたら眠ってしまった。

そしてその後、俺はあの艦の中から盗^てんだ闇の書のデータを隅から隅まで読んで打開策を探そうとしたが、ただの時間の無駄になってしまった。（前回見た時はデータを完全記憶能力で頭に叩き込んだだけで、細かいところの情報は見ていなかったため）

結局俺はその日はそのまま眠った。

因みに俺とアリシアは一緒に布団で寝た。

それは俺がロリコンだからではなく、アリシアが俺の服を握って眠

ったからだ。

断じて俺がロリコンだったからではない！！
大事なことから二回言ったぞ！！

sideフェイト

「アルフ、シユンはちゃんと逃げられたかな……捕まったりとかしてないよね……？」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ、フェイト。あいつは暴走状態のジュエルシードをデバイスも持っていないのに怪我もせず、疲れもせずに止めたんだよ？」

そのあいつが全力で戦うって言ってたんだ。そんな心配いらないだろうさ。

（まったく！あいつも捕まっていないならこっちに連絡ぐらい入れろってんだよ！フェイトがこんなに心配してんのに！）

二人は知らない。戦わずに口論だけで戦いが終わってしまったことなど……

side out

side 隼

そして俺たちは『方舟』の中で何日か同じ様に過ごしていた。

「つかしいなあ……」

「?どうしたの、お兄ちゃん?」

「ああ、いやこつちの話」

「そう?ならいいんだけど」

はあ……また口に出してたか。もしかして家でもいつも独り言言ってたのか?

いや、でもはやては特に反応なかったから大丈夫かな?

それにしても、街中に設置してきた魔力反応(なのは、ユーノ、フエイト、アルフには反応しないようにした。その他には人でも反応する)を感知する機械から『方舟』の中の機器にまだ情報が届かないんだけど、まだ発動してねえのかな?

いくら開発に時間を掛けなかったと言っても失敗したわけじゃないんだろうけど……

流石にまだ発動してないってことはないだろ……

あれ?そ、そういえば原作の『方舟』の中は従来の通信用ゴーレムは入ったら壊れて、専用の通信機を作らなきゃいけなかったんじゃない

なかったっけ……？

その考えに至った俺は、腕時計型（受信のみだから大きい必要がないし、肌身離さず持てるから）の機械をいじるが反応が無い。

……こ、壊れとる……！

しまった……！『方舟』の環境に耐える様な通信機器を作るの試してすらいなかった……！

外は大丈夫なのか……？

「アリシア、俺はちょっと用事が出来たから外に行ってくるよ。あんまりちよろちよろしないで待っててね？」

「うん！でも出来るだけ早く帰ってきてね？」

「ああ。じゃあ行ってくるな」

そして俺は『方舟』から外へ出た。

「はあ、ジュエルシードはどうなったか知らんが街は無事だな。

………ついでにフェイトんとこに顔でも出しとくかな。あいつらとは逃がしてから会ってねえしな」

そして俺は海鳴市から遠見市へ行くために、駅に向かった。（別に急ぐ理由がないから）

そしてしばらく歩いた時に、海から今までとは比べものにならない程の魔力の奔流を感じた。

「……なんか明らかに不味い気がする……つつか感じる魔力量から考えて、ジュエルシードー、二個じゃねえし。

管理局連中の魔力反応もねえし。（予備の受信機を『ジッパー』から出して調べた）

フェイトが前回やったように強制発動でもさせたのか？どっちにする街が危なそうだし俺も行かなきゃな」

そしてすぐに人気のない所に行き、『アンダータ』を使って海岸付近に転移した。

s i d e o u t

s i d e フ ェ イ ト

「アルカス・クルタス・エイギアス。
煌きたる天神よ、今導きの元、降り来たれ。
バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

「ジュエルシードは、多分海の中。
だから海の中に電気の魔力流を叩き込んで、強制発動させて位置を
特定する。

そのプランは間違っていないけど……でも……フェイト……」

「撃つは雷。響くは轟雷。

アルカス・クルタス・エイギアス」

頭上には魔力で作られた球状の物体がいくつも浮かびあがった。
そしてフェイトはそれを解放し、海中に電気の魔力流を叩き込んだ。
すると、それに反応し、海中のあったであろうジュエルシードの残
りの六つが発動した。

「ハア……ハア……見つけた。残り六つ」

これでこの街に落ちたジュエルシードはもう無いはず。
これを封印出来れば母さんも喜んでくれるかもしれないし、あの子
の家族にも危険は及ばないはず。

そしてジュエルシードを持つのが私だけになれば、管理局もあの子
を解放するかもしれない。

ここはなんとしても封印しないと……！！

s i d e o u t

s i d e 隼

俺が転移した先で見たのは、六個の竜巻と戦っているフェイトとアルフだった。

やっぱり管理局の連中はこいつらを捕まえるために封印の手伝いは来ないらしい。

なのは達がいらないことを考えると、あの二人は管理局に協力してて出してもらえないっばいな。そうじゃなきゃもう来てるだろうし。

それにしてもこのままじゃフェイトやられんじゃね？なんか疲れてるっばいし。

強制発動させるために魔力使いすぎたのかな？それじゃ本末転倒だろうに。

しょうがないな、俺が手伝ってやるか。ついでに無事だつて報告もしないといけないし。

そして俺は『^{ダークマター}未現物質』を展開してフェイトのところへ向かって飛び立った。

「おっす。相変わらず無茶してんなあ、フェイト。
そんなんだとつかやられんぞ？」

俺がそうフェイトに話しかけると、フェイトは驚愕した顔をする。

こいつがそんな驚くようなことしたっけ？

「シュン！？ぶ、無事だったの！？怪我とか大丈夫！？」

おお！？ビックリしたあゝ。

そんなに心配させてたのか？こりゃ悪いことしたなあ。

「大丈夫だよ、フェイト。」

それと心配させてごめんな、俺は怪我とかしてないよ。

あと、会いに行けなくてごめんね」

い、言えねえ……会いに行くの忘れてたなんていえねえよ……

「フェイト！！シュン！！二人で話してないで今の状況を考えておくれよ！！」

そのアルフの一言でフェイトがハッとしたように周りを見回した後、

「シュンは逃げて！確かにこの前のは凄かったけど今回ののは前のは比にならないくらい危険なんだよ！！」

と俺に向かって言ってくる。

つかそのセリフはそっくりそのままお返したいんですが。

お前は前回と違ってデバイスは持ってつけど魔力がこの前よりも少なえじゃねえか。

そんなお前に任せられる訳がねえだろうに。

「全く、うるせえなあ。お前は魔力が残り少ないんだからちよつと退いてろ。あとは俺がやる」

俺はそう言いうと、『ジッパー』をから指輪を六個取り出しそれぞれの人差し指、中指、薬指にはめていく。
そしてそれぞれの指輪に魔力を練りこんでいき、発動させる。

「ダークネスARM『スリーリンジスカル』」

「す、すごい……」

俺がそう呟いた瞬間に竜巻の動きがほぼ止まった。
そして近くにいたフェイトも驚愕の声を上げる。

つか『スリーリンジスカル』の同時使用とか、アクセラレータ一方通行の『ベクトル操作』で痛覚を遮断できなきゃ絶対に出来ない荒業だよな。いや、遮断出来なきゃショック死するかもしれんな。

つつかこのコンボは絶対に破れないチートコンボだな。

特にこの世界だと俺しかARMを持ってないから、解除するためのホーリーARMは誰も持ってないもんな。

ま、そんなことよりもっとこの竜巻を消すかな。

いくらチート級の魔力量でもガンガン減ってるから、底を付きかねん。

「アルフ!! お前もこっち来い!!」

そう言うアルフはハッとしたようにこっちに向かって飛んできた。

「じゃあフェイト。これから俺の本気の一部を見せてやる」

ぶっちゃけ言う必要はないんだが、アルフになんか突っ込まれる前に思考を逸らす。

「いくぞ!!」『テレキネシス』全開!!

俺は『テレキネシス』を使い、空の分厚い雲を晴らして、海面に太陽光が届くようにし、

『日輪“天墜”』！！』

『テレキネシス』で捻じ曲げた太陽光、もとい強力な光線をジュエルシードをもとに発生した六個の竜巻全てにぶつけ、ジュエルシードの周りに付いていた余計なものも全てブツ飛ばしジュエルシードを丸裸にした。

と言っても、まだまだ魔力の奔流がハンパじゃないが、この世界の魔力も殆んど解析が終わっているので反射の鎧で反射したり、受け流したりしているので影響はない。

そしてその状態のジュエルシードを『テレキネシス』で自分の近くに寄せて、『未現物質^{ダークマター}』の三対の翼で一つにつき一個のジュエルシードを包み込んでゆく。

そしてしばらくして、魔力の奔流もなくなり、完全な封印状態になった。

「ヤッベ、全力の技と能力の同時使用とかマジパネエ」

神に体いじってもらってなかったら廃人コース一直線だなこれ。いや、いじってもらってなかったらこんなに多彩な能力を持つこと自体がありえないか。

「だ、大丈夫？」

「ああ、大したことは無いよ」

おっと、フエイトに心配されちゃった。

女の子に心配されるなんて、俺もまだまだだな。

つかよく考えたら最近まで結構平和だったから能力の修行どころかそれ自体使ってなかったな。

これからの『闇の書』のこともあるし、修行もしないといけないな。女の子に、特にはやてには心配をさせたくないからな。

……あれ？俺ってこんな人間だったっけ？最近まではもうちょっと冷めてた気がすんだけどな。ま、いいか。

s i d e アースラ

「何をやっているんだあいつらは！！」

なのはとユーノが命令無視でアースラから飛び出したことにクロノが怒りを顕にしている時、以前の少年の反応をエイミイが捉えた。

「え？これって……」

艦長！クロノ君！海上にあの子が…シュン君が！！しかもあの子か

らは殆ど魔力反応がないの!!」

「何だって!?!」

そのエイミイの報告にアースラのブリッジ内が騒然とした。

彼らの常識では「魔力が無い」戦えない」だからその反応も当然である。

そう、彼らの常識では。

「ジュエルシードの暴走体が動いてない!?!
エイミイ!!」

「ジュエルシード、封印されているわけでも誰かのバインドでもありません!
まるで時間が止まったように動きません!」

そしてアースラクルーがその現象を調べようとした時、雲が晴れ、日差しが出たかと思った次の瞬間、まるで空からレーザーが照射されるかのように強烈な光が、ジュエルシードの暴走体に直撃し纏っていたものを吹き飛ばす。

皆が驚きながらも安堵するが、事態は留まらず動き続ける

「!?!危ない!!」

今度は提督までもが動揺する。

いくらジュエルシードのまわりに水や雷などが無くなったと言っても、ジュエルシードは一個の魔力だけで次元断層を引き起こす程の凄まじい威力を持つ。

それが六個も魔力が少ない少年の近くによって行くのだ。

艦長だけでなくアースラに乗っている人なら誰でも悲鳴を上げたいような事態だ。

しかし少年はその状況を嘲笑うかの様に背に生やした純白の三対六枚の翼でジュエルシードを一つ一つ包んでいく。
そして……

「じゅ、ジュエルシード…六個すべての封印を確認しました……」

そんなことを言われてもアースラのクルーは沈黙したまま。

あまりにも理解しがたい内容のため自分で理解出来るよう曲解しようとしているのかもしれないが、判断材料が無さすぎる。そのため、殆どの人は思考停止に追い込まれていた。

「クロノ！現場に急行し、フェイト・テストロッサの捕縛を！！
八神隼とは交戦しないように！まだ能力が未知数なので交戦したら
どうなるかわからないわ！！」

「ッ！！了解！！」

「皆も各自の仕事を優先して！！」

そんな中でも自分を見失わなかった提督は皆に指示を飛ばし、皆が

ようやく動き出した。

「『八神隼』、あなたは一体何者なの？

アリアさんたちがあなたたちの家を監視していたのは何か理由があったの？」

リンディの呟きは周りのざわめきにかき消された。

第十五話（後書き）

はい、というわけでこんな感じになりました

なんか勝手に流れていく……

最初はもう少し軽く進めるつもりだったのに……

俺の性格の所為なのか？

まあそんなことはさておき、今現在の管理局から見た危険度は圧倒的に隼が一番です

これからのリンディたち、アースラクルーの動きにも注目です（アースラサイドは書くかわかりませんが）
正直作者にも予想出来ません（オイ

どうしてこうなった！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7683o/>

魔法少女リリカルなのは～最強の転生者～

2011年10月8日05時04分発行